



FD レポート

Faculty Development

第 4 号

2011. 3.

CONTENTS

巻頭言◆

『FD レポート』第4号の刊行によせて 学長 加賀 裕郎 1

2010年度FD講習会◆

講演『大学教育の挑戦ー学生の主体性を育むための授業の工夫ー』
..... 山形大学 基盤教育院/高等教育研究企画センター准教授 杉原 真晃 3

2010年度新任教員入社前オリエンテーションFDガイダンス開催報告◆

2010年度新任教員入社前オリエンテーションFDガイダンス開催報告
..... 薬学部 医療薬学科 阿南 節子 17
薬学部 医療薬学科 富岡 清
生活科学部食物栄養科学科 田口 良子

大学院におけるFDについて◆

第4回日本化学連合シンポジウム「日本の科学技術を担う研究者を育てる」に参加して
..... 生活科学部食物栄養科学科 西村 公雄 18

本学FD推進事業について◆

学芸学部「情報ネットワーク」(余田義彦先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 和氣 早苗 20

現代社会学部「フィールドワーク入門」
(中山まき子先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 藤井 健志 20

薬学部「医薬品分析化学Ⅰ」(谷本剛先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 藤井 健志 21

表象文化学部「Research in EnglishⅡA」
(北尾キャスリーン先生とS.A.Gates先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 三宅えり子 22

生活科学部「臨床栄養学Ⅳ」(小松龍史先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 村木新次郎 23

第5回FD-YG会開催報告 生活科学部食物栄養科学科 山本 寿 24

第6回FD-YG会開催報告 教育・研究推進センター主任 神田 知子 27

FD図書紹介『学生主体型授業の冒険：自ら学び、考える大学生を育む』
..... 教育・研究推進センター主任 藤井 健志 29

関西地区FD連絡協議会報告◆

関西地区FD連絡協議会「FDデザイン研究サブグループ」に参加して
..... 教育・研究推進センター主任 三宅えり子 31

FD活動報告(2010年度)◆

メルマガ「同女FDニュース」の発行報告◆

次年度FD事業の概要・日程◆

卷頭言◆

卷頭言 『FD レポート』 第4号の刊行によせて

学長 加賀 裕郎

教育の充実を目標として教育開発推進センターが設立されたのは2006（平成18）年4月でした。同センターから『FD レポート』創刊号が刊行されたのが2008（平成20）年3月、その後、発行母体が教育・研究推進センターに代わってからも『FD レポート』の刊行が続き、早いもので、今回で第4号を出すことができる運びとなりました。関係各位のご協力に深く感謝申し上げる次第です。

歴史的に言うと、大学は主として学問教授機関であって、教育機関ではありませんでした。ヨーロッパにおいて、大学とは学位授与権をもつ機関、つまり Master とりわけ Doctor の学位を出すことのできる機関だったのです。大学が教育機関化する端緒を何処に求めるかは難しい問題です。あるいは、その端緒はアメリカ合衆国で発展した教養大学（liberal arts college）にあるかもしれません。ヨーロッパで発展した大学は研究大学（research university）でした。しかし liberal arts 自体に教育という意味が含まれているわけではありません。近代になると liberal education という言葉が生まれますが、これは liberal arts が教育の文脈に取り込まれる第一歩だったと言えましょう。

liberal education はエリート養成のための教育でした。それは職業のための、食べるための必要から解放されて、理性と道徳性を自己目的として練磨する教育でした。liberal education からエリート主義的側面をそぎ落とし、それを民主的社会的市民のための教育に換骨奪胎したところに一般教育（general education）が生まれました。liberal arts から liberal education や general education への流れの中で、大学が教育機関化していったと言えるでしょう。

日本の場合はどうでしょうか。日本の大学史は1877（明治10）年の東京大学の創立から始まると言えるでしょう。古い時代の大学の講義の典型的なパターンは、教授が自作の講義ノートや著作を読み上げるというものでした。学生は教授の口述したことをノートに書き写すことが学習活動でした。私が最近読んでいるアメリカの本があって、そのうちの後半は、今から約110年前に、当時の大思想家が行ったシカゴ大学での講義ノート、前半はそのノートの解説です。ただし当の講義ノートは講義者自身のものではなく、受講者のノートに基づいています。これは当時の学生が教授の講義を逐一、ノートに写し取っていたことを示しています。日本の大学もアメリカの場合と似たようなものでした。

それでは教授が講義ノートを読み上げ、学生がそれを筆写するという、今日から見ると奇異な授業スタイルが、どうして通用したのでしょうか。その理由は、大学が学問教授機関だったからです。教授は文字通り「学問を教授する人」だったのです。ちなみに、私の学生時代には、自分の書いた教科書を読み上げるだけの講義をする高齢の教授が、まだおりました。

大学が単なる学問教授機関から教育機関的側面を持ち始めるのは、第二次世界大戦後の大学改革で、アメリカ流の一般教育が日本の大学にも導入された時ではないでしょうか。しかし日本では、一般教育の伝統がなかったため、これを旧制高等学校の教養主義的教育として受け取り、大学教育の前半二年間に置きました。このことには二つの意味があります。一つは民主的市民を育成するための一般教育が旧制高等学校のエリート主義的な教養教育として受け取られてしまったということです。もう一つは一般教育が大学教育の前半、専門課程の下にあるものと受け止められたことです。これらは、さらに次のような事態を派生させました。まず一般教育が専門課程の下部に位置づけられることによって、大学の主流は相変わらず学問の研究・教授にあると見なされたことです。次に一般教育がエリート主義的な教養教育と理解されてしまったために、大学生がもはやエリート予備軍でなくなってしまう時代、つまり1960（昭和35）年と1970（昭和45）年の間に、教養もまた廃れてしまったことです。竹内洋氏の著作のタイトル『教養主義の

没落』を拝借すれば、まさに教養主義は没落しました。この結果、高度経済成長期に、教養教育、一般教育も廃れたのです。

果たして、大学設置基準の大綱化以降、教養教育、一般教育を担当してきた教養部が多くの大学で解体され、第二次世界大戦後の大学改革でも温存された、学問教授・研究機関としての大学の自己認識が前面に出てきました。しかし皮肉なことに、時代は大学の自己認識とは逆の方向に動きつつあったのです。先ず2002（平成14年）年に中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」が、また2008（平成20年）年には同じく中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」が出されました。各々は1960（昭和35）年と1970（昭和45）年の間に一旦は廃れた教養と教育の再興を求める答申なのです。1990年代以降、経済界もまた大学に対して教養教育と学士課程教育について具体的な要求を強めるようになりました。経済界が大学に対して求める教育は、今や研究能力や専門的知識以上に、我々が「教養」によってイメージするものに近づいているのです。

以上のような現状を、どのように評価すべきか難しい問題です。しかし公平に見て、現在、大学に求められているのは「教養教育+専門基礎教育」です。現在、大学に求められているものは、我々の同志社女子大学にとって追い風だと言えるのではないのでしょうか。というのは我々の大学は liberal arts を大事にし、またきめ細かい指導と知徳併行を本分としてきたからです。課題はこれまでの蓄積を個人的なものとして、協同作業と成果の共有を通して、組織的な教育充実の活動にすることです。日常的、自発的なFD活動が最も効果的であることは言うまでもありません。『FD レポート』が私どものFD活動のフォーラムとなることを期待しております。

2010年度 FD 講習会◆

同志社女子大学
2010年度 FD講習会次第

日 時 2010年 9月15日 (水) 15:30 ~ 18:30
場 所 友和館 Y401多目的スペース

司 会
教育・研究推進センター所長
川崎 祐子

- | | | | |
|---|---------|--|---------------|
| 1 | 開会の辞 | 川崎 祐子 | 教育・研究推進センター所長 |
| 2 | 学長挨拶 | 加賀 裕郎 | 学 長 |
| 3 | テ ー マ | 大学教育の挑戦—学生の主体性を育むための授業の工夫— | |
| 4 | 講演講師 | 杉原 真晃 氏 (山形大学 基盤教育院 / 高等教育研究企画センター准教授) | |
| 5 | グループワーク | | |
| 6 | 質疑応答 | | |
| 7 | 閉会の辞 | 河野 健男 | 教務部長 |

講演『大学教育の挑戦—学生の主体性を育むための授業の工夫—』

山形大学 基盤教育院 / 高等教育研究企画センター准教授 杉原 真晃

(開会)

司会 (川崎所長) 2010年度のFD講習会を始めさせていただきます。今年度は身近な私たちの授業改善について考える機会としたいということで、企画をさせていただきました。講師には、制度的にFDに取り組んでいることで有名な、山形大学の基盤教育院、高等教育研究企画センター准教授の杉原先生をお迎えしております。

まず、学長のご挨拶をいただきます。

加賀学長 それでは、一言ご挨拶させていただきます。本日は夏休みの、まだ授業が始まっていない時期をつかまえて、山形大学の杉原先生に、「大学教育の挑戦」というテーマでご講演を賜ることになりました。昨年は神戸大学の川嶋先生がFD全般に関するお話をなされましたが、今年は非常に具体的な、学生の主体性を育む授業の工夫という、一歩切り込んだ視点からのお話をしていただければいいかと思えます。

皆さんも御承知かとは思いますが、現在は4年制大学の進学率が50%を超えています。専修学校、短大を含めた中等後教育機関への進学率は80%に近づいています。つまり80%近くの若者が18歳以後も、何らかの教育機関で学んでいるわけです。大学進学率が50%を超えると、マーチン・トロウの大学発展段階の分類で言うと、大学はユニヴァーサル型ということになります。大学に進学することは、エリート型では特権、マス型では権利であるのに対して、ユニヴァーサル型では義務になります。

現在、大学に入ってくるごく普通の若者に対して、われわれ大学人はどのように対応していけばいいのか。ともすると私ども、と言いますか、特に私などは、古い世代の古い学問をやってきた人間なものですから、学問中心の発想からカリキュラムや教授法を考えて、あとはできなければ学生のせいにするという傾向があったのであります。しかしこれからの大学を考えますと、学問研究中心の大学は当然残っていくわけではあります。多くの大学は研究以上に教育を、学問を通じた人間形成を中心にやっていく必要が

出てきます。

その時、どのように学生を育てていくか、という教育的視点が大事になります。しかし大学人としてこの点に関しては、関心が向きにくい傾向がありました。私も長い間FD的なものに関心が向きにくかったのですが、近年になって、これではいけないと思うようになりました。そのうえで工夫を重ねていけば、やがてそれが学生の成長につながっていくのではないかと思います。

今日は最近の教育状況、若い人たちの現状について、様々な話を伺うことができるのではないかと思います。私がとくに大事だと思っているのは、個人で工夫するだけでなく、組織的に工夫することです。学部・学科の教員会議のおり、あるいはそれが終わった後での懇談のおりに、本日のようなトピックについて、話し合う機会がコンスタントにあれば、まことに意義深いと思います。今日のお話は一時間ほどだと思いますが、講演の後には、向かいのカフェテリアで情報交換会もありますので、どうぞ最後までご参加いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

司会 杉原先生のご紹介をさせていただきます。杉原先生は、神戸大学教育学部を卒業後、京都大学の大学院に進まれ、現在は、山形大学の基盤教育院高等教育研究企画センターにご所属です。山形大学は、ホームページで公開されている『あっとおどろく大学授業NG集』が世間を席卷したということもあり、非常に活発にFDをされている大学です。

著書も『大学教育における学習共同体の教育学的考察のために』や、『遠隔授業におけるコミュニケーションの特徴と学生の学びの特徴——KNV実践の分析を通して——』など、多数書いておられます。

また、3月の京都コンソーシアムでのFDフォーラム分科会の中でも、双方向学習について杉原先生がスピーチされておられます。全国を飛び回って講演をされている非常にお忙しい先生に、今日は本学においていただきました。

本日はいつもと少し趣向を変え、最初に先生にご講演いただいたあと、グループワークを入れていきます。近くに座った方同士で話し合ったあとと質疑応答に入る形にしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、杉原先生、どうぞよろしくお願いいたします。

杉原先生 皆様、こんにちは。山形大学の杉原と申します。ありがとうございます。今、川崎先生のほうからご紹介いただきまして全国を飛び回っているというような話でしたが、そのような大した者ではなく、私がここに立っているというのは本当に恐縮の限りで、果たして、このお話をいただいたときにも今日は私が一体何ができるかなと。しょせん私はまだ准教授ですし、アラフォーで、それも任期付きなのです。本当に苦しい中でやっておりまして、不安定でやっているのです皆さんに、「こんなのいいですよ」とか、「教育はこうあるべきだ」、などとそのようなことはとても言えなくてどうしようかなとっております。そのような意味もありまして、今日は私の考え方と山形大学ですとやっている実践を紹介させていただいて、それをきっかけに、やはり一番この同志社女子大学さんのことをご存じだと思います皆様自身が、ご自身の授業を振り返ったり、悩みをみんなと共有したり、どうすればいいのかということについての知恵を交換する、そのような場にしたいと思っておりますので、ぜひご協力いただければありがたいかなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。このようなところへお呼びいただいて光栄なのですが、このようなところだと苦手なので、前に行きます。

基本的には、皆様のお手元にレジユメがあるかと思います。こちらに沿って、ご説明させていただきたいと思っております。パワーポイントは必要なときに使いますが、あまり使いません。よろしくお願いいたします。ありますでしょうか。表裏印刷で3枚になると思っております。

テーマが「大学教育の挑戦」ということで、学生の主体性を育むということに観点を置いて考えたいと

思っています。この「挑戦」という言葉に、私は二つの意味をいつも持っています。一つはやはり、先程のユニバーサル化という話にもありました、あるいはグローバル化、いろいろなことが今、求められつつあります。時代が変化してきている中で、大学がその時代の変化にどのように対応していくのかという、そのような挑戦、チャレンジというものが一方にあります。もう一つは、逆です。つまり、そのように適応していく中で、失ってはいけないもの、守らなくてはならないものということに対する守りといえますか、攻めてこられるものに対する挑戦といえますか、そのようなダブルの意味を込めて、挑戦というように、私はいつも考えております。

1番目に、「取り巻く状況」ということで、ネガティブなできればあってほしくないなということ、つらつら書かせていただきました。これがなければ、従来どおり、もう本当に、楽しくと言うと変ですけども、従来どおり大学教育をしていけばよかったものを、残念ながら、幸か不幸か、時代が変わっていったということで、何か変わらなければいけないということになっているわけです。一つ一つ細かくは説明いたしませんので、もし後ほどこれはどのようなことかというものがありましたら、情報交換会の際でも結構ですし、あるいは、この話を聞いていく上でここだけはもう1回確認しておきたいということがあれば、遠慮なく、話の途中でも挙手していただいてご質問いただければと思います。特に今回は学生の主体性ということですので、入り口、そして二つ目は出口というところがポイントになるかと思いますが、やはり学生の質が変化しているというのは事実だと思います。進学率も上昇しております。若者人口も減っておりますので、入ってくる学生がいろいろ多様になっています。これも実は違うのでしょうか。ちょうど今朝のインターネットのニュースで、小中学校、高校も含めて不登校が17万人で、去年よりも6,000人減っているけれども、やはり17万人もいるというような記事があったのです。大学生で「不登校」という言葉はまだまだそれほど使われませんが、いわゆる不適応とか、そのような学生も多く、多くはないですけども少なくないです。2～3%台ですが、決して見逃せない人数の人が、休学をしたりあるいは退学をしたりということであるわけです。何かしら手を打っていかなくてはならないのは事実だろうと思います。一方で、出口です。ここがポイントになってくると思うのですけれども、職業訓練の要素を重視しております。第2期中期計画のところでも、やはりキャリアアップ、そのようなものを重視しなさいというような流れになってきているわけです。そのような中で、では大学は本当に職業教育訓練所であっていいのかというところが常に問われ続けているわけです。そのような流れの中で、私たちはどこまで、あまりにあれもやって、これもやって、とやり過ぎるとバーン・アウトしますので一体何をもっとすべきなのかという議論を真剣にしなければいけない時期なのだろうと思っているわけです。

2番に入りたいと思います。では、学生の主体性を育む授業とは？学生の主体性を育むという意味では、決して職業訓練、職業人、仮に経済産業省が提言しているような社会人基礎力というものに限定しなくても、普通私たちが学問をする上で、学習する大学生には主体性を持ってもらいたいと思うのはここは重なるところだと思うわけです。では、その主体性を育む授業を、私たちは一体どのように考えるべきなのかということですが、

2-1で、「学生が抱く不満・不安」ということで、いろいろなアンケートの調査や、あるいは学生さんとしゃべっている中で聞くと、四つほど挙げさせていただきましたが、例えば、「理解度を無視した、話の進行」などがあるわけです。これは当然と言えば当然なのですけれども、ちょうど一昨日ですか、私は今、学生と自主勉強会のようなものを開いてましてそこで学生が雑談でポケモンの話をしていたのです。「ポケモン・ブラックが出て、ホワイトが出て、グリーンはもうしたけど、レッドはまだで……」など、僕は何のことか分からなくて、ポケモンのグリーン、レッド、ホワイトなどと言われても、僕はポケモンといたらあのポケモンしか知らないの、よく分からなくて、途中でついて行けなくなったのです。学生にとってはそれは当たり前の言語ですし、当たり前の意味なのですけれども、おそらく私たちも当たり前だろうと思ってしゃべることで、実はそうではなくて、学生たちは全然チンプンカンプンで分からないということがたくさんあるのだろうなと思っているのです。

次に行って、例えば、「興味・関心等のズレ」などです。これもそのとおりだろうと思うわけです。

「位置づけの不明確さ」。まあ、そうでしょう。僕は、神戸大学の幼児教育科に入学しまして、幼稚園教育を3年ほどしていたのですけれども、そのときに小学校の教員の免許も取ろうと思って、初等数学という授業を取ったのです。初等数学の授業、パッと最初のオリエンテーションに座ったら、おじいちゃん先生でしたけれども、先生がもう最初から授業をされるのです。そうすると、何をやるのかなと思ったから、いきなり背中を向けて、黒板にズラズラズラーッと、数式を書いていくのです。i、複素数ですかね、iを使って、数学的帰納法で何かをウワッと証明しましたのです。僕は文系なので全然分からなくて、もうその教室内、200人ぐらい入れる教室なのですから、ザワザワ、ドヨドヨドヨと、最初にざわめいたのです。「何なんだ、これは」と。もう多くの人は小学校教員の免許を取りに来て、そのような授業だと思って来ていますから、さっぱり分からないというような感じで。授業が終わって、さすがに僕もこれは一体何なんですかと聞きに行こうと思ったら、他にも30人ぐらい、ウワッと教壇に手をやって、「先生、これ何なんですか」というような話になったのです。でも、おじいちゃん先生なので、「はい、はい、はい」というような感じで、「いや、これでいきます」と言って、そのままそこから去って行くのです。せめて、これをやるなどは言わないですけれども、これが一体、例えば教員養成課程の初等数学というものにどのような意味があるのか、私たちが学ぶ意味があるのかというぐらいは説明してほしいなと思うのですけれども、説明もなくてただつらつらやるのです。当然、当時はまだ90年代でしたから緩くて、僕もそのあと一度も授業に出なくて試験前になって、理系の学生に友達がいたので「ちょっと教えて」と言ってノートを見せてもらって、持ち込んで可を取ったという全然おもしろくない授業だったのです。

それは私にも責任はありますけれども、この位置付けが分かるか分からないかというのは大きいと思うのです。なぜこれをやっているか。それはたぶん学問の本質でもあると思いますけれども、特に専門教育の場合は位置付けが明確な場合が多いと思います。カリキュラムがしっかりあって、今ここだという説明はしやすいと思いますけれども、いわゆる教養系、リベラル・アーツも含めて、なぜこの科目があるのかというのは、特にこちらの大学はリベラル・アーツの伝統が長いですので説明はしやすいと思いますけれども、そうでない大学にとっては、専門教育をするという意識を持っていると、ではその科目を教養として授業開講するということがどのようなことかということで、説明がない授業が多いのは事実です。学生からも、山形大学の1年生に聞くと、どうしてこの授業をやるのかが分からないという学生の声が圧倒的に多いのは事実です。そのような意味では、この不明確さというのは、やはり学生が抱く不満・不安では大きいのだらうと思います。

あとは、「意欲減退をもたらす話」と「環境・活動」とありますけれども、今年の1年生だったかな、去年だったかな、1年生としゃべっている時に、とある学部の学生だったのですけれども「先生、聞いてください」と言うのです。「うちの学部長が、このように言うのですよ。『君たちはゆとり世代だから、だめなんだよな』とか、『徹底的に鍛えてやる』などと言うのです。」本当に、「エーッ！」という感じではないですか。だって学生たちは、自分たちはそこに生まれ育ってしまっただけでゆとり世代には何の罪もないわけです。なのに、「ゆとり世代だから、君たちはだめだ」などと言われたらもうやる気をなくすわけです。「なんか気の毒やな。もうちょっと言い方あるやろ」と思うのですけれども、そのようなことというのは、たぶんやってしまうでしょう。

あと、今日は上映しませんけれども、先程ご紹介いただいた『大学授業NG集』というビデオを作ったのですけれども、そこの中にも、学生を馬鹿にするような発言ということで、「そのようなものはNGです」というようなシーンがあるのです。難しい単語をウワッとしゃべって、学生がアーツと落ちたときに、「分かる？ ああ、どうせ君らには分からへんねんやろなあ」などというような、そのようなシーンがあるのです。ついつい私たちは、教えたことが分からないと「なんで分からへんねん」と、このようになってしまうのです。「なんで？」と。1回目はいいのですけれども、これが2回、3回やっても

分からなかったら「もう、あんたのせいや」と思ってしまうところがあるのです。僕なども結構あります。家庭教師を学生の頃にしていて、やはり何回怒ったことがあるかということ思い出しました。人間はそれほど寛容な動物ではないので、あるのだらうと思うのですけれども、学生がそこに少しつらさを感じているのは事実なのです。

このように、学生が不満・不安を抱いています。ここはまず主体性を育むような授業の第一歩だろうと私は思っています。これらがクリアされればそれでいいかということとそのようなわけでもないのだらうと思っています。

そのような意味で、2-2「主体性を育む授業の工夫」ということで考えてみたいと思っています。授業内容、形態、授業方法、あるいは授業ツール、授業で使う道具ですね、いろいろあります。いちいち説明いたしませんので、これも「これ何ですか」「大福帳って何ですか」など、もしあればまた後ほど聞いてくださればいかなと思います。基本的には、一番大事なものは、一番上の授業内容であることは間違いないと思います。どのような、面白い内容、面白いというのは、おもしろおかしいという意味ではなくて、学問的に本当に知的刺激がある、ハッと、ヒヤリ・ハッと体験なのです。そのようなことが、ヒヤリ・ハッとではないですね。あれは事故ですね。おもしろさとか、「ああ、そうなんだ」というような、そのようなおもしろさです。あるいは、興味・関心です。あるいは、切実さです。自分の生活や自分の人生、そのようなものに対して非常に距離が近いという意味の切実さです。オーセンシティブ、真正性という表現でもあるかと思います。あるいは生活世界との関連ということで、このような内容というものが一番重視されるものであらうということは、共有できるかなと思っています。

昨今はこれだけでは対応できないので、授業形態①と書いていますが、これは②がありませんのですみません、消しておいてください。授業形態の工夫をしたり、あるいは授業方法ですね、ワークシートを使ったり、ディスカッションを入れたり、そのためのツールとしてワークシートや小テストを入れたり、あるいは、昨今は電子掲示板等ですね。あるいはSNSを使うとか、そのような形でいろいろなものが開発されつつあるわけです。学習ポートフォリオという言葉があったり、いろいろと工夫がされています。「cf」は参考ということで、このような考え方がありますよということです。参加をしたり、協同・成就というものがこれが学習には重要なのですよと。最近接発達領域、皆さんはご専門ですからあれですけれども、1人でできないけれども、少し助けがあればできる、ぎりぎりのゾーンというものがあまして、そこにどれだけ私たちが食い込めるかという、全く、私たちにいきなり例えば北島康介のように泳げと言われても無理ですから、次の私たちの一步はどこにあるかというそのようなゾーンを探すのが、この最近接発達領域です。協同学習、あるいは一番下の筒井先生、教養の崩壊と昨今、叫ばれていまして、そこに、大衆文化を積極的に入れていってはどうでしょうか。「歴女」という言葉が最近ありますけれども、特に女学生が多いそうですけれども、歴史のゲームを入り口にして、歴史の勉強に入っていくという入り口は何でもいいのではないかという、そのような考えです。いろいろありますよということで、このような形でいろいろな工夫があるよということです。

ページを開いていただきまして、次のページです。2-3では、では、学生の主体性を育む授業、いろいろな工夫がされていますが、その光と影ということを考えてみましょう。先程の挑戦の二つの問題とも関連してくると思います。光はもう私があえて説明する必要もないと思います。主体性を育むというのは重要でしょう。能動性や意欲を向上させたり、学ぶ喜びなど、そのようなことも学ぶでしょう。あるいは、学問を学び、学生、大学生としてのアイデンティティといいますが、自己形成ということも重要でしょうし、あるいは、何といいますが、よく「教授錯覚」という言葉が医学系の教育の方が使われるのですけれども、教授錯覚といまして、錯覚ですね、勘違いする、伝達したつもりという勘違いです。教えるというのは、私たちは、授業を90分、ワッツと言わなければいけない。裏を返せば、言ったら学習されているという錯覚に陥っています。そこをしっかりと、学生の主体性ですね、本当にそこで彼らが何か主体的に学んだのかということに着目することで教えたつもりからは脱却できるだらうということは光として

考えられます。

一方で、影です。一つ目です。「学習の能動性や意欲の格差」とあります。例えば、では主体性を育みましょうと。一番、今されているのは、「グループワークをしましょう」「何か調べましょう」と、授業の中で活動させるわけです。そうすることで、ただ座って聞いているだけだと受動的なので、何かアクションを起こす、能動的になって、主体的な学習が始まる、などという考えになりがちなのです。そのときに起きやすい課題というのは、このあたりなのだろうと思います。

「不和」というのは、学生間で、すごく頑張る人と頑張らない人がいて、グループで何か一つのものを作って、それを成績評価の対象にすると、頑張っていない人まで同じ点数をもらえます。「先生、あの子全然やってないのに、同じ点なんてずるい」という言葉をよく聞きます。「言っても、言っても聞かない」などです。授業外学習で、みんなで授業時間外に集まってやるのですけれども、「忙しい」と言って、来ない。「なんで忙しいのか聞いた？」と言ったら、「自動車教習所で忙しい」など、「自動車教習所って、それも重要やけど」というような、学生としては非常に不満が募るわけです。

あるいは、「活動と学びの非比例」とあります。授業の中では、活動的になるわけです。ウワーツとみんなが動きだします。調べますし、ディスカッションもしますし。ハッと見ていると、「うわ、すごいですね。学生さん、ほんとに元気があって」と言うのですけれども、よくよく聞いたら、それほど話が深まっていない、などです。どこのスイーツがおいしいとか、そのような話もたまにあったりするのです。活動的にはなっているけれども、学びが深まったかどうかは分からないということが、往々にして起きます。それだったらこちらがもっとグワーツと講義するという形のほうがいいのではないかというように戻っていく場合というのは、少なくないと思います。

二つ目「学問という本質的な教育、学問における本質的な学びからの乖離」ということで、やはりどうしても負担が増えてくるのは事実だと思います。従来は、講義をしてテストをして終わっていたのが、それではちょっとあれだなということであれば、グループ・ディスカッションをお手伝いしなければいけない、あるいはワークシートを書いてもらって毎回そこにコメントを書くなどという、私たちがやっていた仕事は、結構増えているのは事実だと思います。

学生へのケアが丁寧になればなるほど研究時間がないということも、これも事実だと思います。そうすると、研究にリンクしていない授業ということにどんどんなっていきます。それは学生にとって、本当にいいのかなと思います。というように、危惧をするわけです。

あるいは、時間がなくて、本来ならば学生と対話をして、「どう？」とか、あるいは、オフィス・アワーではないですけれども、学生さんが研究室に遊びに来て、何だかんだと話をして、しゃべる。学生さんの話を聞いても、やはり先生方とそうにしゃべりたいという意見がものすごく多いです。けれども、しゃべれない。先生のところへ行ったら「忙しい」と言われるとか、何かやりにくいという話をしています。特に先程、学長先生のほうから人間形成という話もありましたけれども、授業以外のところでのそのような語りや対話ということが結構人間形成に大きく影響すると思いますので、そのようなところがなくなってくるということに対して私たちは常に意識をしておかなければいけないだろうと思っています。

あるいは、「活動的な授業、学生のニーズに対応した授業への偏重」ということで、どうしても社会から求められる力あるいは資格、そのようなものにグーツと行きがちです。キャリア教育などもそうだと思いますし、大学によっては、学生発案型授業、先程ちょっとどこかに書いていましたけれども、学生発案型授業といいまして、学生が、このような授業を受けたいという授業を発案してそれを単位化していくという授業があります。それはそれで面白いです。素晴らしいです。よく練られているし、先生方がアドバイザーに入って、高めるところまで高めていらっしゃるのですけれども、それは一つ間違ったら本当に学生がやりたいことばかりをやらせるのかというような論理に反論できなくなるのです。ここをどうするのかというところも問われているのだろうと思います。

あるいはFDという考えで言いますと、この偏重を言いますと教育技術的な話です。「こうやると、こう板書を書くといいですよ」とか、「プレゼンテーションするときは、あまり何も見ないで……」など、それはそうなのですが、教育技術的な話に偏りすぎているところが昨今ではありまして、本来、私たちが議論するところは、それ以外、むしろ内容、教育内容や、学習がどれだけ進んでいるかというところにターゲットを置かないといけないのですけれども、つついそのようなところに偏ってしまうということも、また意識をしていかないといけないだろうと思います。

あとは、教員の負担の激増です。これは、特に資格系の授業に多いと思います。主体的な学習を、などという話をしに行くと、必ず質問に「はい。私は看護系の授業を持ってるんですけど……」「法律の授業で……」など、資格というのは、決められたカリキュラムがビシッと、今でもたくさんあります。「教えていかななくてはならない内容が山ほどあって、その中でも一生懸命精選して伝えています」と。「なのに、そこでまたグループワークを入れるなんて無理です」という話がよくあります。もうそのとおりだと思います。無理なのだと思います。「じゃあ、どうしましょう」という話を本当に真剣にしないといけませんし、「本当に無理なのかな」という話もまたしていかなくてはいけないだろうと思います。とにかく、このようなところで板挟みになって、孤立化して疲弊していく先生がいてしまうと、やはり不幸なのだと思いますし、学生にとっても不幸なのだと思います。

次に、「変化・流動する社会へ対応する力の育成」という、これも先程ちらっと言いましたが、要は、主体性を育むということ自体が目的になったら、本来の意図が失われていくとか、あるいは、「社会が求めているから、これに適應する人材を育成しましょう」そのような主体性で果たしているのかということです。その一番下にも書いていますが、能力の個人主義化ということで主体性というものが、単なる利己主義的な主体性であっていいのかということです。あるいは、個体能力主義、個人化という言葉がありますけれども、主体性、主体性と、学生の主体的な、小テストだとか、レポートだとか、とにかく、能力がもう、学生が個人で所有しているものといえますか、そこにありますと。できないのは学生が悪いのだというように陥りがちな主体性という論理が、やはりどうしてもあるのです。そこに、絶えず私たちは自覚的にならないといけないし、できないのは、できない何かしらのバックグラウンドがあるかもしれないですし私たちの環境の整備のしかたがあるかもしれません。そのようなシステム的な考え方でこの主体性というものを捉えるということも、また忘れないようにしないといけないだろうと思っております。

次のページです。このような形で、主体性の二重構造といえますか、光と影を意識しながら、私は一応、授業を普段作っているつもりです。そのいくつかをご紹介していきたいと思っております。先程の光と影がすべてこの中で表れるわけではありませんが、いくつかに触れられるといいかなと思っております。今日は、授業事例を六つほどご紹介したいと思います。いくつか、いろいろなパターン、特徴のある授業です。3-2です。1番目「フィールドワーク 共生の森もがみ」ということで、これは1年生対象の教養教育科目です。

山形県は四つの広域圏に分かれておりまして、そのうちのこの最上広域圏というのは、四つのうち、唯一、高等教育機関がないのです。大学と短大のないところで、それは何を意味するかといえますと18歳から22歳ぐらいの若者がごっそりいないのです。そのような町なわけです。役場に就職したなどという人はかろうじて数名いますが、もう本当に、行ったら分かるのですけれども、小さい子供か、おじさんか、じいちゃん、ばあちゃんしかいないのです。若者が歩くだけで、ウワーッとみんなが見えます。外国人を見ているような目で見られるのです。そのような地域です。そこへ行って、地域がやっている人材育成活動であったり、地域再生活動に参加をして現状を知るということです。そのようなことをテーマにした授業なわけです。フィールドワーク系の授業は昨今盛んに行われていると思いますが、これは、いわゆるインターンシップとは違って教養科目としての授業になります。

授業構造は、このようにオリエンテーションをして、自然学習をして、フィールドワークをして、大学へまた戻ってきて中間学習をして、フィールドワークに2回目行って、最終レポートを出して活動報告会

をする、そのような授業です。前に少し写真を出しましたが、現地に、ここは畑の作業を手伝っているところです。帰って来て活動報告会をプレゼンテーションするということです。

この授業で、私も含め私たちが抱えている課題は何かと申し上げますと、まず最初に、活動を活発にしないという問題が起きたのです。1年生ですから、最近まで高校生でしたので、現地の人から「ちょっと、最近の大学生は、一体何なんだ」と。「挨拶もしない。何かありますかと聞いても、質問もしない」と言うわけです。大学生というイメージというのは、そのようなイメージなのです。すごく立派で、質問をバンバンして、何か地域のために助言してくれるだろうとか、すごく期待を抱いてくださっているのです。私たちが考えれば、普段見えていますから「それは、質問はしいひんやろ」と思うのですけれども、見えていないわけです。高等教育機関がないので、その地域の方は知らないのです。「あ、そうか」と。いろいろ工夫をしないといけないと思ったわけです。あとは「活動した。して、楽しかった」で終わります。「感動した。ご飯がおいしかった」などです。「ご飯がおいしかった」が一番多いのです。それはそうでしょうけれども、それで終わります。これではいわゆる学びとして、本当に大学生としての大学の授業としてこれでいいのか、と僕は思ったわけです。平成18年からこの授業が始まって、僕は平成18年の11月から山形大学に赴任して、ちょうど1年間分、ただ見ていたのです。これではだめだろうと、いろいろ手を加えたのです。

工夫としては、なぜここに行くのか、という説明をオリエンテーションでしっかりしたり、あるいは、学生サポーターといまして上回生ですね、この授業を1回受けている学生をターゲットにしますが、この上回生にサポーターとして現地と一緒にってもらいます。この学生サポーターに研修をします。「あなたたちの役割はこうですよ」と「こういうことを注意してくださいね」とか、「一言声をかければ、学生は素直に聞くので、挨拶もするし、背中を見せるつもりで、自分たちでまず積極的に挨拶をして、地域の人に語りかけてくださいね」とか、そのような話をします。

現地講師への研修ということで、現地講師の方にも、「昨今の大学生は、別に質問しませんよ」などと言います。どうやって発言してもらうかのノウハウや、ちょっとしたコツをお伝えすることで、学生とのコミュニケーションがウワッと広がっていくということに繋げておりました。

あとは、活動報告会に関しても練習会を行うということで、特にこの練習会では、地域にお世話になって1泊2日を2回行っていますから、学生はかなり感動して帰ってくるのです。「うわー、よかったな」「ありがとうございます」という感謝の気持ちを持っているので、学生さんたちの活動報告会のときには、現地の人にも聞きに来ますよということをまず伝えます。教室の中で終わるような、チャンチャンのプレゼンではなくて、現地の人聞いて「うわー、よかったな」と、「この学生さんたちを受け入れて、ほんとはよかったな。また来年、ぜひ違う学生さんも来てほしい」と思ってもらえる、そのようなプレゼンをしましょうというように、いわゆる本物ですね。バーチャルといいますが、教室空間だけで終わるような学びではなくて、本物と触れてもらうということに注意しています。

あと、今は、もう一つ課題があります。プレゼンテーションについてそのように言うと、学生が本当に目の色を変えてプレゼンテーションをウワッとやりだすのです。新たな兆候を調べ出したり、本当に素晴らしいプレゼンテーションが、ここ1・2年、出来上がってきているのですけれども、時間がないというのです。半期が終わって、大体7月末ぐらいにプレゼンをしますので試験期間とかぶるのです。そうすると学生たちは、試験勉強もしたいし、でもこちらもおざなりにできないしということで、忙しいということの課題を次にどうしようかということが、今の私が抱えている課題です。

続きまして、(2)の「三代目自分を創る」という授業です。これは、演劇や映画制作、コンサート、お笑い、いろいろ自分たちでやりたい活動を考えて実現させるという授業です。表現活動の企画・運営・授業内への授業の自主評価への活動・授業のマネジメントを全て学生が行います。自分を創るというその名の通りの全て自分たちで行う、そのような授業です。

課題としては、先程も少し申し上げましたが、学生間の格差であったり、不和です。あるいは、目標設

定が低いのです。「こんなことをしますよ」例えば映像班が今年あったのですけれども、映像の「もうこんなん、3時間、4時間ぐらいあったら、もうできるやん」という、そのようなものを発表しようとするわけです。そうすると、半期間この45時間×2で掛けたときに、とてもとても、大学の授業としてこれは保証できないでしょうと。そのときに、どうしようかと考えるわけです。

この授業は、学生が自分たちで作る授業なので、教員がどこまで介入すればいいのかいつも悩む授業で、あまり入りすぎると学生は、「いや、学生主体じゃないやんか」というように寄りかかってくるのです。「先生、先生、あれも教えて、これも教えて」と、ワーツと来るのです。なので、それがないように、でもあまり離れすぎるとあまり動かないしとか、その距離感が非常に難しい授業なのですが、今やっている工夫は、授業時間外で個人面談とグループ面談をして、メタ認知といますか、メタ分析、自己評価をしてもらっています。今のあなたでいいのかどうか、今のグループのこの状況でいいのかどうかということの評価してもらって新たに目標設定をしてもらいます。目標設定をしても、グループ学習ですからなかなかうまくいかないことのほうが多いです。なので、何につまずいて、ではどうしたらいいのかというような、そのような役割性のようなところも少し捉え直してもらいます。個人面談をやる中で、それぞれが持っている役割認識を、少しずつ、彼ら、彼女たちが語り直していく、そしてそれを共有しようということで、みんなでグループ会議を開いてなんとか当日を迎えたのですけれども、非常に苦労している授業の一つです。

さて、次のページです。3番目「なせば成る！～大学生生活始め～」ということで、これは、私自身が初年次教育の科目として位置付けておまして、大学生としてやりたいことを見つけ、チームのためにその実施計画を練ります。そのために必要な諸条項、大学の歴史、知的財産、大学生の実態、地域社会から見た大学等を、文献・インターネット・聞き込み等を通して知るという授業です。これは、集中講義をしています。4月から5月にかけて、毎週土曜日に、1日かけて4回やります。ゴールデンウィークが明けて最後に1回やりますけれども、山形大学といますか、多くの大学生は、ゴールデンウィークが明けて、ガクッとモチベーションが下がる場面があります。今でしたら9月問題などとよく小中高では言われていますけれども、夏休み明けもありますね。やはり、モチベーションがガクッと落ちます。特に5月というのは、最初の4月は居場所がなくて、学生さんはもう必死なのです。ウワーツとアンテナを張って、何せモチベーションを上げておかないとやっていけない時代があって、そして5月を迎えて、クラブ・サークルと居場所ができるわけです。そうすると、フツと落ち着くときなのです。そして、フツと落ち着いた先のクラブ・サークルでは、「パンキョウ？ ああ、出なくていいよ」とか、「あんなの適当にノートさえとっておけば」というような、「楽勝科目、これやで」というような話がガンガン飛び交っているわけです。僕はその直前、手前でなんとかしたいと思って、この授業を開講したのです。課題は、ここに書いています。学科による土曜使用ということで、毎週土曜日ですので、最近はある学部で土曜日にキャンパスツアーをしたり、あるいはガイダンスをしたりという、結構そのようなものがありまして、学習の質が保証できないということが抱えている課題です。そこは、別課題といますか、そのようなものを設定して、ラーニング・マネジメント・システムといますけれども、パソコン・インターネットを利用しまして、授業外の学習をサポートしていくことをしています。

4番目「キョウヨウ教育必勝法」という、これは講義形式です。これも1年生対象の教養科目です。140か150人ぐらいの受講生、決して多くはないのですけれども、少なくともない、そのような授業です。内容は、「教養教育の歴史的・社会的文脈を知って、自分なりの教養・教養教育の意義を考える、メタ教養教育論」ということで、日本的な姿勢、世界的な姿勢、そして山形大学が今提示している教養教育というものはこのようなことですよと提示をした上で、あるいは大学生論として、「昨今の大学生は、意欲がないと言われてますよ」とか、「受動的学習って、受身なのですよ」と、「まじめ・生徒化、生徒になるとかと言われてますよ」というような話をして、そして、「皆さん、どう？」というような、「そう言われているけれども、そうじゃないよ」と思う人もいるかもしれないし、「そんなこと言われても……」と思

う人もいるかもしれないし、「まさしくそのとおりだろう。どうしようかしら」と思う学生もいて、では、自分自身、これから4年間あるいは医学部でしたら6年間、山形大学は6学部あって、教養科目は全学部の学生が自由に取れますので、教室の中にはいろいろな学部の学生が、それぞれが、それぞれの教養教育の過ごし方、あるいは4年間の大学教育、6年間の大学教育での学生生活の過ごし方を考えてもらう、そのような授業です。

この授業は、講義を大体70分しまして、そのあと20分間、ワークシートを毎回書いてもらいます。当初ですけれども、このワークシートを毎回チェックして、コメントをダットと書いていたのです、150人。負担が大きすぎて、今はやっていません。非常に楽しいのです。読んでみると、学生のワークシートは本当に楽しくて、学生の思考のプロセスや、毎回変わっていくその旅の、旅行といえますか、旅の様子などが分かって非常に面白いので、ついつい読んでしまうのです。そうすると、もう夜も暮れ、日も明け、鳥が鳴きというような、そのようなことが繰り返されて、「これでいいのかな」などと思って、「こんなよりか、僕も任期付きで、研究もしないといけないし」などと思うと、ついついできないということになってしまうのです。

あるいは、活動的になれば質が高いとはいえないところでもありますけれども、ワークシートの質があまり深まってこない学生もやはりいるのです。どうしようかと思って、今やっている工夫は、まず少数で丁寧にチェックしてローテーションをしています。分かりやすく言えば、150人ですから大体10人ずつを毎週見ていくと15回で150人全員を見られるということです。あとは、気になる、少し質が低いなという学生だけにしっかりコメントを書くというように変えています。

あるいは、段階を踏んだ主体的活動の導入ということで、皆さんもあるかもしれませんが、ワークシートで、「はい、書いてください。自分の考えを書いてくださいね」と言うと、もう途端にできない。「先生、答え何ですか」とか、「これでいいですか」などと聞いてくるのです。それは当然そのような学習習慣を身に付けてきたから仕方ないのだと思っていますので、まず最初は、1番、①に「書く」と記載していますけれども、もうとにかく書けと。量を書きなさいと。とにかくたくさん書こうと。質は問わないから、一生懸命、自分が考えたことであればいいよということで、とにかく書きましようということ、まず段階、3週目ぐらいまでやります。そのあとで、それが正解かどうかを聞いてきますから、正解かどうかはない。「あれやったら、他の学生が書いてるの見る？」ということで、他の学生が書いてるものを紹介しています。それで「あっ！」と、ある人はそれをまた目指して書くかもしれないし、ある人は「ああ、僕と全然違うな」と思って、また自己反省しながら書き方を変えていく学生もいるかもしれませんが。それが済みましたら、今度は3番、③で「話し合う」と。今度は対面でグループ・ディスカッションをしましょうということで、直接的に議論して、意見を言い合って、そのあとでもう1回ワークシートを書き直してもらうという作業をしています。そしてそのあとで、④で、今度は「質問、反論を想定する」と。話し合ってお互いに質問していましたから、今度は自分の頭の中に仮想の学生さんを作って、その人と対話してもらいます。自分の中に他者を作って、その他者は何と質問するかなとか、それと違う観点を自分の中になんとかして作るようにということをやっていきます。このような形で、段階的に今やっているということです。

そして、学習の質としては、困難な課題です。決して簡単ではありません。けれども面白いような課題で、つまづきながらなんとかそれをやっとうとするということを重視している、ということをやっています。学生同士、自己研鑽、相互研鑽といえますか、磨き合ってもらう、そのようなコミュニティを作りたいと思っているわけです。これですね。

次、「保育課程総論」ということで、写真はありますが、これは専門科目です。私が非常勤で行っている短大があるのですけれども、いわゆる専門科目の必修科目です。保育課程の意義、および保育内容の構想を学んで、保育課程の立案・作成ができるようになるということを目指した授業で、これも講義のあとにワークシートをします。

課題としては、女性の方が多いのですけれども、彼女たちは、実践との距離があると、途端にやる気がなくなります。途端にバタバタ、本当に分かりやすく、寝だします。あるいは、パンを食べたりもしています。授業のあとで「どうしたの?」と聞いたら、「おなか空いてたの」と言われました。「そうか。おなか空いたら食べるんだな」と思って、非常に感動を覚えた記憶があります。とにかく、自分の実践に役立たないと思ったときの学生のあの反応というのは、本当に素直だなと思いました。あるいは、教えてもらうのです。何かを伝えて、板書してノートに書き留めるということに、やはり慣れているのです。そうでないスタイルの授業をすると、途端に授業評価が下がります。僕も1年目に、5点満点の2点台だったような気がします。もうショックで、「えーっ!」というようなことがありました。それだけではないと思いますけれども。理由はもっとあるのだと思いますけれども。あるいは、必修ですから、「とりあえず単位取っとうろ」資格を取っておきたいという人もいますので、意欲の低い学生もいるという課題を抱えています。

工夫としては、ケーススタディを入れることで、実践、この保育課程というものはなぜ必要なのかというようなことを、常にケーススタディを通して考えさせるようにしています。先程紹介した、段階を踏んだ主体的活動もここで加えまして、とにかく予習をしっかりしていきましょうと。ケーススタディを入れたり、ワークシートを入れたりするので、これは、資格系といえますか、教えなければいけない内容が結構ありますので、それを入れる分、授業中にしゃべる時間がどうしても減りますので、もう「読んできなさい」と言うしかないのです。「読んできてください」と。でも、「読んできてください」だけだったら絶対読んでこないのです、どうしようかと思って、今は確認テストを冒頭にするようにしています。確認テストを冒頭にして、最後にまた考えるタイプのワークシートを入れているという、今はダブルでやっております。

あるいは、「やる気のある学生を基準にした授業運営」というものがありますけれども、一生懸命にやる人が報われるような授業設計です。特に保育の授業ですので、その授業自体が保育に活かされるようなものがたくさん詰まった、ヒドゥン・カリキュラムという言葉がありますけれども、私たちが言語で伝えられないところで感じられる、授業の風土や、文化や、そのようなところも注意をしております。一生懸命にやる人は報われます。「一生懸命にやりたくない人もいるでしょう。でも、邪魔をせんとってね」と思います。「マナーというのも、こうですよ。そのマナーはどうしてあるかということ、一生懸命にやる人の集中が切れるんですよ」と。遅刻してきて、冬場など、うちは雪が降りますから、コートを着てその上からかばんをガーンと掛けて、それで遅刻したときにウワーンと入ってくるわけです。そして、大学生というものは後ろから詰まりますから、後ろにたくさん学生が座っているのに、その前にズカズカッと来て、そして、前のここに来て、座ってから帽子を脱いで、かばんを取って、コートを脱いで、などということとされると、もうその半径1メートル、2メートルは、もう集中どころではない状況が生まれるわけです。そのような話もしながら、「映画館で、皆さん、そういうことをしないでしょ」などと言いながら、しゃべっているというのが現状です。

最後、「未来学へのアプローチ」というものがあります。これは、皆さんのお手元にグリーンのパフレットを今日、配布させていただいております。こちらをご覧くださいと思います。学生主体型授業をどのように、山形大学で、あるいは他の大学の方々にもご利用いただける形で開発できるかということにチャレンジしたプロジェクトで、去年、このパイロット授業として、「未来学へのアプローチ」というものを実践したわけです。真ん中をピラッと開けていただいたら、真ん中にそのパイロット授業、「未来学へのアプローチ」というものがありますが、このように、三つのテーマで、三つの分野の先生がリレー式に授業を行って、それぞれが相互研鑽をしていって、授業公開をして、検討会を毎回して、ノウハウを共有していったというような授業です。

この授業自体は学生からも非常に好評だったのですけれども、レジュメに戻りますと、このプロジェクト自体は、この「未来学へのアプローチ」という題目の授業をすることが目的ではなくて、ここで共有し

ていく学生主体型授業のノウハウをいかに広めていけるかというところに課題を持ちましたので、今年はこちらで培ったノウハウを基に、自分たちの授業、あるいは他の先生の授業に広めていくという段階なのです。

私自身のことで言いますと、パイロット授業や、他の授業のノウハウが即、自分の授業に活きるわけではありません。今まで五つほど紹介してきましたが、とても、ここでつぎ込んだノウハウや成果が、なかなか生かせないということがあるわけです。

なので、工夫としては、課題の明確化と言われてはいますが、各授業で、自分が持っている授業で一体何が課題なのかをまず明確化することから始めないと、単にノウハウを輸入しても全く意味をなしません。「課題がこうだから、このノウハウだったら使えるかな」などと、そのような使い方をしないとどんどん崩れるであろうと思って、明確化をします。なお、それに応じて、ノウハウを加工していきます。そして、試行錯誤するわけです。いわば、今まで右ハンドルばかりを運転していて、左ハンドルがいいと思って、左ハンドルでパーツといっても、なかなかすぐにはうまく運転できないので、やはり試行錯誤しながら、身体感覚としてつかめるまで時間がかかります。やはり、そのようなことが必要なのだらうと思っています。そのためには、やはり教員の自立性や、もっと言えば教員の主体性といえますか、が必要でしょうし、そのための、矛盾するかもしれないけれども、時間的なゆとりや、あるいは助け合える協同性や、そのようなものが必要だらうと思います。

先程、私は、教育課程総論が授業評価で2点台でしたと言いましたけれども、そこですぐ給与に反映されてしまって、2点台ジャケットのようなものがあって、実際にはないですけれども、もしそのようなものを着せられて、「ああ、あの先生、2点台の先生なのか」という制度がもしあったら、新しいことにチャレンジできなくなるわけです。ジャケットは言いすぎとしても、給与に反映されるということが、メリットもありますけれども、デメリットとしては、挑戦ができなくなるということは、やはり問題なのだらうと思います。そのような意味では、教員の主体性・自立性を担保するだけのゆとりや、あるいは協同性、支え合い、助け合い、そのようなコミュニティが必要なのだらうと思います。あるいは学生さんですね、SA制、スチューデント・アシスタントがありますけれども、そのような方々の協同ということも、今後、私の中では考えたいと思います。

さて、最後のページです。これが終わりましたら、後程グループワークに入りたいと思います。「主体性を育む授業を作るために」ということで、学生の意欲、能動性の喚起のためには、まず私たちが最大限のことをやるということです。最大限のことをやって初めて、「私たちは、ここまでやってるんだ。なんだから、分かってちょうだい。学生さん、ちょっと頑張っただけ」と言えるでしょう。言えるかなというのが、たぶん、私なりの倫理性といえますか、考え方です。それを行うためにも、教員の自立的教育活動と、それを実現させるための、固有性・自律性・現場性とありますけれども、そのようなものを、寛容といえますかね、配慮が必要なのだらうと思います。

学生さんとしゃべっていると、先日も、私たちは、「FD ネットワークつばさ」といまして、東日本地域、北海道、東北、関東地方でFDのネットワークを作っているのですが、参加校の学生さんがサークルと一堂に集まって、「大学を良くしていくには、どうしたらいいのか」という議論を、この間、8月21日にしたのです。ある学生さんグループは、先生の問題点など、それを言いに行くところがありません。その人は、生協の白石さんをイメージしていたのです。そのようなものをバーンと貼る掲示板を作ったらいいです。「この先生、こんなんでも問題がある。ここをこう改善してほしい」と。先生に限らず、大学のここを改善してほしいと。それに、答えというようなもので、大学や先生が見ざるをえないところに貼っておくと、答えをしていないこと自体が、また一つの、何といえますか、答えといえますか、吊し上げではないですけれども、見せしめ的な要素もあって。でも、分からないでもないです。そのときに、「ああ、いいアイデアですね」と、僕が司会をしているので、「いいですね」と言いつつ、もう一言その時は付け加えたのですけれども、「できれば、いいことも貼ってね」などと言うのです、そのアイデアの

ときに。やはり、私たちも機械ではなく、人間なので、批判されてばかりだと、どうしてもへこむし、新しいことをしようとも思わないし、人間ですから、批判する人の話を親身になって聞いてあげようとは、普通は思わないではないですか。やはり好意を持ってくれる人に好意を持つということが、人間は心理学的にもあると思うのです。「いいところ書いてね」というようなことを言ったりして、そのような、ある側面では役割は果たせないような私ではあるけれども、違うところの特徴があって、そこは生かせるなど、いろいろあるでしょう。そのようなところに関して、私たちが協同で何か配慮し合えばいいかなと思っています。そうすると、学生の意欲が高くなって、教員の意欲も高めてというサイクルができるのであろうと思います。

「学問的教育内容、研究との関連」というのは、どこも一緒ですね。先程申し上げたとおりです。学生との話し合いが欠かせないでしょう。それを批判し合うような、溝を挟んで何か批判し合うような対話ではなくて、本当に親身になって、お互いが語り合えるような対話ができるだろうと思います。

その次が重要だと思いますが、どのような主体性を育もうとするのかということをも明確化、そして挑戦していくとともに、やはり学内で議論をして、共有化していくという機会が、どうしても必要になってくるだろうと思います。

課題が明確でないような改革というものは、やらされ感、負担でしかないということがあって、これは先程ちらっと紹介しましたが、学生が何のためにこれをやっているのかというその意識がないと、もう本当に、不満であり、不安でありという話をしましたが、私たちも同じで、何のためにこの改革をしているのかとか、どうしてこのカリキュラム編成が必要なのかという、まず課題を共有しないと、私たちも一歩踏み出そうとしなくなります。そのような私たちが授業をしたら、それは当然、学生も、主体的に踏み出せるような学生は育たないだろうと思いますので、この授業をなんとか……。とはいえ、簡単に状況は改善されないでしょうからということで、教員同士の支え合い文化は、こちらの同志社女子大学さんにはあると思いますが、ますますこのようところが発展していけるといいかなと思っています。

話ばかり長くなって申し訳ありませんでしたが、今から少し、私の今の話を基に、意見交換をしていただきたいと思います。ちょっと前をご覧ください。4人ほどで一つのグループがいいかなと思います。5人は、少し多いと思います。3人か4人がいいかなと思いますが、恥ずかしいなという人が多いところは、5人入っていただいても結構です。強制はいたしません。自らの授業での悩み、課題、このようなことで悩んでいるとか、今このようなことに挑戦しようと思っているけれども、うまくいかないとか、そのようなことを意見交換していただきたいと思います。そのあとで、そこで出していただいた課題を、「どうやったらいけるかな」とか、「ああ、一緒だね、その課題。こうやってみたらどうかな」とか、「それは、でも、あれじゃないかな。こうじゃないかな」とか、いろいろそのような、やはり皆さん知恵というものは絶対あると思いますので、それを共有していく場にしたいと思っています。4時に、この2番と3番を記入していただければ、後ほどそれを回収させていただいて、文字に起こして、何か報告書などが多分あると思いますので、それで皆さんにフィードバックすれば、グループ以外のところの知恵もまた、知恵ができるのではないかと思います。よろしいですか。はい。何か紙はありますか。ありがとうございます。

では、4人、ないし3人、5人等で、近くの方でも結構ですし、「いや、ちょっと遠くのほうがいい」という人は遠くでも結構ですので、少しグループになっていただけますでしょうか。できましたら、ショットバー、カウンター方式で、4人はしゃべりづらと思いますので、机を動かしたり、いすをクルッと回転させていただくほうがいいかと思っています。

(グループワーク) ※グループワークの内容をまとめた「FD 講習会におけるグループワークを終えて」は、2010年12月15日開催の教授会で配布し、周知をはかりました。

杉原先生 そろそろ時間になってきてしまいました。大変恐縮なのですが、もしよろしければ、こ

れで終わりますけれども、このあとずっとしゃべっていただいても、会議室的にオーケーであればいいかなとも思いますので、ひとまずここでいったん終わりたいと思いますので、今書いていただいたものを、申し訳ありませんが、整理していただいて、アンケートと同じところに出していただくということでもよろしいですか。アンケートの横にでもポンと置いていただけるといいかなと思いますので、皆さんとまた共有してもらいたいと思います。

それでは、本日の会は、これで終わりたいと思います。皆様、お疲れさまでした。ありがとうございました。

河野教務部長 今日、先生のお話を聞かせていただいて、一つ、僕は印象に残ったところがあります。「具体的な学生の主体性をはぐくむための、授業の工夫」ということで、全部で六つぐらい事例をご紹介していただきました。この中には、大学の中で授業をするのではなくて、現場に出かけていくというようなフィールドワーク型の授業があったり、あるいは学生が自主的にテーマを選んで、自分たちで学生集団を授業の中で作って、自分たちが自ら集団的に学んでいくとか、今度は逆に、1人の教員が担当するのではなくて、授業を担当する教員のほうが集団的に何か授業を展開するとか、いくつかの種別のものが、いろいろな形で含まれていたかと思います。

うちの大学では、あまり授業の中で学生を集団として組織して、グループごとにいろいろなことを作業させるとかは必ずしも多くはないのではないかと思います。さまざまな要素をハイブリッドした形での、新しい授業の模索というものを考えるという意味で、同志社女子大学の中で、これからFDを中心に、学生の主体性をどのように作り上げていくのかということをも具体的に考えるときの、一つの授業のやり方、考え方として、非常に大きな、有益なヒントをいただいたと思っております。

そしてまた、パーソナルなところではなくて、ワークグループのような形で、かなりの規模をもって、さまざまな学生の実態や、「どうしたらいいでしょうか」というようなことを話し合える場というものが与えられたということも、実は本学では非常に珍しいことなのではないかと思われました。

ですから、今日はいろいろな角度でお話しいただいて、われわれが今後のことを考えていくために非常に刺激的な要素がたくさんあったことに感謝申し上げます。忙しい中、お越しくださいます、刺激を与えていただきました杉原先生に、本当に心から感謝を申し上げたいと思います。どうも、本当にありがとうございました。

(閉会)

司会 河野先生、どうもありがとうございました。

まさしく、これぐらいの規模で、2キャンパスに分かれているわれわれが、授業に特化した内容について自由に話をする機会というものは今までなかったことだと思います。そのようなアイデアそのものをご提供いただきましたことも含めまして、杉原先生に感謝を申し上げたいと思います。

FDというのは、ともすれば、何かをしなければならぬという圧迫感を感じられる先生も多いかと思います。けれども決して、FDをすることは教育の画一化でもなければはやりの教育技術にすぎなければならぬというものでもなく、今まで自分がやってきたことを見直すきっかけ作りをしていただいて、先生方の個性を生かしつつも学生にも合うような形とは何かなど、先生方が自由に話していただくことから始まっていくのではないかと思います。そのような良い機会を与えていただきましたことに、心から感謝を申し上げます。

(事務局より)

※上記FD講習会講演関係資料のご希望がございましたら、教育・研究推進センター事務室までご連絡ください。

2010年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告◆

2010年度新任教員入社前オリエンテーションが2010年3月23日（火）に京田辺キャンパス知徳館261会議室において開催されました。毎年開催されるこのオリエンテーションでは、当センターも同志社女子大学の研究支援体制、研究倫理、FD ガイダンスについて約90分の内容で説明を行っています。本年度からは参加された教員に報告書を提出していただくことにしました（本冊子に掲載可とされた教員のみ掲載）。

薬学部医療薬学科 特別任用教授 阿南 節子

私は市立堺病院で長年薬剤師として勤務した後、本年4月に本学の薬学部に着任しました。新任教員入社前オリエンテーションではさまざまな情報をいただきましたが、FD (Faculty Development) は医療現場では全く聞いたことがない言葉でした。オリエンテーションで、FD は「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」のことであり、大学の授業改革のための組織的な取り組み方法を指すということを知りました。また本大学においては個々の教員がFD を実践するための様々な支援ツールがあることを知りました。新任教員の様々な疑問に答える資料として、FD ハンドブックが貸し出されましたが漫画で明快に解説されており、FD 入門書としては最適だと考えます。

薬学部医療薬学科 教授 富岡 清

先ず始めにオリエンテーションをして頂いた方々に感謝申し上げます。

オリエンテーションとは何かを考えさせる斎藤総務課長の司会で教員入社前オリエンテーションが始まった。アイスブレイキングなゆとりも与えず、Teele 学長のご挨拶は同志社女子大学の真面目さを感じさせた。甲元宗教部長のキリスト教主義教育についてのお話は、キリスト者でなくても構わないことを少し強調しすぎだが、真面目さ一本やりであった。服部教務部長、嶋田次長のお話は女子大ならではの教育の楽しさを感じさせてくれた。川崎教育・研究推進センター所長、鈴木事務長、そして堀内事務主任のお話は、30年以上に渡って研究一本やりの生活をしてきた私には、これからはあくせくしないで大学生活を楽しめそうだとの思いを抱かせてくれた。

新しい職場はそれでもストレスの多いものであるし、まして初めての女子大である。本オリエンテーションのお陰で大いに安心感が得られた。仲間意識を芽生えさせて頂いた同期入社の先生方との縁を大事にして本学での教育者生活を充実したものにしたい。

生活科学部食物栄養科学科 助教（有期） 田口 良子

新任教員入社前オリエンテーションに参加させていただいた。参加者は全7名で10時30分から16時過ぎまで、昼食に1時間の休憩を挟んで行われた。

午前中は、Teele 学長から学長挨拶、甲元宗教部長から同志社女子大学のキリスト教主義教育についての説明があり、同志社女子大学の教育理念、新島襄先生とキリスト教主義教育の実際について理解が深まった。

午後は、服部教務部長、嶋田次長から本学の教育について、実際にシラバスや規則を見ながら概要および主要な注意事項の説明を受けた。続いて、川崎教育・研究推進センター所長、鈴木事務長、堀内事務主任、今村係員から、本学の教育推進FD、研究支援体制、研究倫理について説明を受けた。FD 事業として本オリエンテーションを含む様々な活動が実施されていることがわかった。また、研究支援体制として研究資金の内訳や申請方法、さらに、研究倫理、研究業績管理について説明を受けた。最後に高本総務部長から、本学の意思決定のしくみ、法人のリスク管理体制などについての話があった。このようなオリエンテーションに参加させていただいたことで、入社後速やかに業務に移行できたと感じている。貴重な機会をいただいたことに感謝したい。

大学院におけるFDについて◆

周知のように、大学より1年早く2007年に大学院の設置基準が改正され、FDが義務化されています。当センターではFD関係のセミナー等に参加される場合、近畿一円であれば交通費の補助を行っています。今回のシンポジウムの開催地は東京でしたが、大学院に特化したFDシンポジウムということで特別に補助を行いました。参加にあたっては出張報告内容をFDレポートに掲載することを条件としました。

第4回日本化学連合シンポジウム 「日本の科学技術を担う研究者を育てる」に参加して

生活科学部食物栄養科学科 西村 公雄

開催日程：2010年3月16日（火） 13：15～16：50

開催場所：化学会館（東京都千代田区神田駿河台）7階ホール

主催：日本化学連合

共催：科学技術振興機構、化学技術戦略推進機構、経済産業省、日本化学会、
日本化学工業協会

1980年に17,000名程度であった博士課程の学生数は、2009年には約74,000名に達した。この数の増加は、当然出口の確保を困難とする。その解決には、企業にも受け入れられるような「博士の質」の向上こそが必須となるのは言うまでもない。文部科学省は、2002年に「21世紀COEプログラム」を立ち上げ、大学院の教育研究機能の充実・強化を打ち出し、博士の質の向上を目指してきた。また、出口の量的確保という面において、経済産業省は、業界と大学界が人材育成において幅広く対話を行い、具体的行動につなげて行くべく「産業人材育成パートナーシップ」を推進してきた。しかしながら、学の目指す博士像と産の期待する博士像間には未だギャップが存在し、時代にあった「博士の質」の向上は思うに任せぬ状況下にある。

本シンポジウムは、次世代の日本、そして世界の科学技術を担う「人材の育成、技術者の育成」に向けて、産学間に横たわる問題点を浮き上がらせ、その解決策を見いだすことで、時代にあった「理工系博士」とは何かを問うたものである。

シンポジウムは、特別講演とパネル討論により構成されていた。特別講演は、学の側から日本学術会議の岩澤康裕氏が「大学院教育の高度化：現状と課題」と題して、①学生の質の低下、②法人化による教員の疲弊、③社会的評価が低い故、理工系博士課程在籍者数が減少しつつある現状（2002年約18,000名、2008年約16,000名）が問題点として報告された。また、諸外国に比べ、学生の緻密な指導が行われている点を評価し、国に対して、人材育成を「消費」ととらえるのではなく将来への「投資」と見てもらいたい旨要望がなされた。

産の側からは、ダイセル化学工業代表取締役専務 八浪哲二氏が「社会に貢献する高度理系人材育成」と題して、企業としても「科学技術立国」を守るために、理工系人材の確保・育成は緊急の課題である。が、日本の博士は、基礎知識を身につけないまま極めて狭い範囲の専門的研究に偏っているため、未経験の課題については応用が利かない。入社後2年にわたる社内教育の必要性を考えると、修士修了者を採用した方が企業にとっては都合がよいとの問題点が指摘された。

両氏の特別講演をうけて「大学院の理想の姿と博士の社会貢献」と題してパネル討論が引き続き行われ、4名のパネリストがそれぞれ10分ほどの講演を行い、質疑応答がなされた。文部科学省高等教育局大学振興課長 藤原章夫氏は、「大学院教育における現状と課題」と題し、「教育」を博士課程に導入するこ

とで社会のニーズに応じた人材を育成しつつあることを力説した。早稲田大学理工学術院 教授 朝日透氏は「大学院における研究力と社会力の相乗的教育」と題して「実践的博士」を育てるためのカリキュラムの構築について報告した。旭化成株式会社 顧問 府川伊三郎氏は、「企業が求める博士人材」と題し、一芸のみならず、多芸に秀でている人材の育成が急務との要請を行った。日本放送協会解説主幹 早川信夫氏は、「教育メディアから見た博士」と題して研究者になりたいと思う男子児童が多く、博士希望者数は先細りでない現状を報告した。

大学院教育に関して、産学には未だ大きな認識のずれがあることがこのシンポジウムを通じて理解できた。その解消には、大学側には、①基礎教育体制の充実、②カリキュラム改革（狭い領域の研究指導に特化しない。ディベート型への転換）、③囲い込み、縦割り構造の排除（学生の流動化）を主に推進する必要があること。また、産側においても①インターンシップの実施や、②講師の派遣により専門領域のみならず、幅広い基礎知識を持つ人材育成に積極的に協力することが肝要であることが求められている。

いずれにしても、大学院生は研究することが第一義ではあるが、それだけでは不十分で、幅広い教養・ディベート能力の向上などを兼ね備えることが要求されている。そのためには、横断的なカリキュラム編成が必要で、複眼的にもものを見ることができる学生を育てていかないと、社会のニーズに追いつけないことを痛感させられた。大学院でのFDを考える面で、大変参考となるシンポジウムであった。

最後に、このシンポジウム参加に関し、教育・研究推進センターより旅費を捻出いただいた。多くのことを学ばせて頂き心より感謝するものである。

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部「情報ネットワーク」(余田義彦先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 和氣 早苗

講義中心になりがちな内容であるにも関わらず、PC 実習や演習を適度にはさみ、学生の集中力を途切れさせないような工夫がされていました。例えば専門用語についての学習も説明してしまうのではなく、学生自身に調べてもらうという工夫もされており、参考にさせて頂きたいと思いました。今後、情報システム課の見学や LAN ケーブルの自作も実施されるようで、なかなか実体として感じ難いであろうコンピュータネットワークの知識をできるだけ体感できるように工夫されている点が印象的でした。

またこの授業では、Web サイト上にたいへんに充実した授業の補助ページが用意されています。授業のまとめや授業資料のダウンロードはもちろん、学生が毎回の学習を振り返ってのコメントや質問をサイト上に投稿することができます(学生相互にコメントや質問を閲覧可能)。そして、その全てに対し余田先生が非常に丁寧に返答コメントをつけておられます。自宅で充分予習復習をすることが可能であり、なにより丁寧な先生のご対応に、学生の学習のモチベーションも大きく上がることだろうと思われまます。

今回見学をさせて頂き、私自身大変刺激を受けました。特に授業サイト導入による自主学習のサポートには強く感銘を受け、ぜひ近いうちに真似をさせて頂きたいと思いました。余田先生ありがとうございました。



現代社会学部「フィールドワーク入門」(中山まき子先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 藤井 健志

「フィールドワーク入門」という科目名のイメージから、授業担当者が「フィールドワーク」の基本用語や概念について講義のみで一方的に進めるものと思って参観していた。しかしながら、実際の授業は私の想像していたのとはまったく違っており、授業そのものが、「フィールドワーク」になっていた。

授業はまず、先週のレビュー(課題評価)を返却することから進められた。返却されたレビューをよく見ると、学生同士が互いに採点しているとのことであった。採点・評価という作業を通して、用語を正確に理解しているか学生自身が再確認できるし、他人の文章をよく読んで理解する努力の中から自身の文章に対する心構え、責任感なども出来上がってくるのではないかと思う。

最終的には実際に京田辺市に「フィールドワーク」に



出て、学生自身が立てた計画にしたがって実施する。したがって、学生に要求されるレベルはかなり高いが、その分「フィールドワーク」の技術の習得のみならず、学習者としても確実に成長できるはずである。

さて、「入門」の意味である。授業の途中に佐藤郁哉氏の「フィールドワーク」への取り組み・業績が何度か引用された。職業としての「フィールドワーク」ではどんな準備が必要になるのか自分自身で見つけてほしいとの担当者からのメッセージである、と私なりに参観終了後に勝手に解釈いたしました。中山先生、貴重な機会を与えていただき、誠にありがとうございました。

薬学部「医薬品分析化学Ⅰ」（谷本剛先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 藤井 健志

この授業は薬学部医療薬学科1年次生配当の必修科目「医薬品分析化学Ⅰ」である。再履修の学生も出席しているため、100数十名を少し越える受講生であったかもしれない。

参観日当日の授業内容は、前回実施した中間試験の講評からはじまった。その後は、中間試験までの授業の復習をかねており、問題演習を中心に授業が行われ、前回までに学習した必要な事項の再確認が行われた。したがって、通常の授業（未学習分野の学習）がどのような形式で行われているのかが残念ながらわからなかった。

手元に資料を配付してくださったので、ひさしぶりに分析化学の授業を受けることができた。ただ、20年ぶりの頭には「分析化学」の授業は忘れてしまっている事柄もあり、少々難しく感じた。しかしながら、谷本先生の説明は、分かりやすく、要所要所で反復されており、学生の理解はさらに深まったのではないかと思う。

基本事項というのは、決して「易しい」わけではないので、学生にきちんと理解させることはかなり難しい。特に、分析化学関連の基本用語は普段の生活（医薬品業界では当たり前用語である）ではあまり出てこないものもあるので、とっつきにくく概念を正しく理解させること自体大変である。

このような機会を与えてくださった谷本先生に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



表象文化学部「Research in English II A」 (北尾キャスリーン先生と S.A. Gates 先生) の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 三宅えり子

2010年12月7日、Research in English IIA の授業を見学しました。開講テーマは“Communication and Linguistics”で、英語英文学科3年生30人を対象に11回目の Intercultural communication に関する授業が行われていました。

まず最初に、オープン・ノート・クイズが配られました。このクイズにはこれから先生が話される内容のポイントだけが書かれています。今回の授業のテーマである Intercultural communication に関するポイント5点にそって話がすすめられました。異文化間のコミュニケーション・スタイルの違いを学ぶのに、このオープン・ノート・クイズを通して学術的な要点がまとめられるだけでなく、具体的な例が豊富に紹介され、臨場感のある理解が促されます。また、このようなクイズ形式で講義の内容を書き取らせることは、学生の集中力と英語の聞き取り能力を高めることにもつながっています。途中、Gates 先生がご自身の日本人の奥様とのコミュニケーションの具体例を紹介され、学生の理解が深まったように思われました。それぞれのポイントの後に、質問や不明な点がないかを学生に確認され、さらにすべての説明が終わった後で、学生どうして書き取った内容を確認しあう時間が与えられました。したがって、このオープン・ノート・クイズは、学生の理解を促すためのツールとしてよく工夫されたものであることがわかりました。

この後、授業の後半に移りますが、前半で話された授業内容の定着をはかるために、当該内容に関する True or False のクイズ（9問）が行われました。今回の授業を通して、英語を話す際に単に正しく流暢に話すだけでなく、互いの文化とコミュニケーション・スタイルの特徴を理解したうえで話すことがいかに重要であるかということがわかりました。説明で話された具体例は、学生の実生活に即していてなじみやすくユーモアも交えたものだったので、学生の反応もよく、とても楽しそうに聞いていたのが印象的でした。授業の最後30分は、プレゼンテーションの打ち合わせに使われ、日本の家庭にホームステイしているアメリカ人が遭遇する様々な状況を想定してロール・プレイを行うという設定でした。このロール・プレイは授業目標にそって工夫されたもので教育効果が期待できます。

北尾先生と Gates 先生には、貴重な授業参観の機会を与えていただきましたことを感謝申し上げます。ありがとうございました。



生活科学部「臨床栄養学Ⅳ」（小松龍史先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 村木新次郎

小松龍史先生の「臨床栄養学Ⅳ」の授業に参加させていただいた。わたしは、もとよりこの領域の門外漢である。その日のテーマは、手術前と手術後の食品・栄養についてであった。私事にわたることで恐縮ではあるが、この秋、手術のため入院を経験したわたしには、偶然のこととはいえ、先生のその日のご講義をわたしは興味深く拝聴した。以下は小松先生の授業に接してのわたしの小さな感想記である。

早朝9時からの授業にもかかわらず、多くの受講生が熱心にとりくんでいる姿勢がみてとれた。まず、学生がノートをとっていることに感心した。授業に出てノートをとるということは当然のことではあるが、日ごろ、ノートをとらない学生、ノートのとり方を知らない学生をしばしば見ているので、学び方が訓練されて、それが身についている理系の学生の常識をあらためて知らされたおもしろいものである。小松先生は、適宜、すでに学習した内容に言及し、あらたな情報をそれとリンクさせるかたちで、授業を展開された。適度なやさの口調で具体的な例をまじえて説明をし、10分に1度くらいのわりあい、関連する過去の授業の理解を確認するために、学生への問いかけをし、教員からの一方的な講義になることを回避して、授業をすすめていくというスタイルであった。問いかけとその反応の際は、意図的にか、あるいは無意図的にか、関西弁をつかって、学生との距離を近いものにするという工夫がされていた。

黒板はときどき使用されたが、それほど多くはなく、文字通り音声による講義が中心で、わたしが学生時代にうけた授業のスタイルと似ていて、アナログ人間のわたしには快いものであった。パワーポイントやクリッカーなどの機器をつかえばいい授業ができるというものでもなかろう。昨今、どのように教育するかという方法や技術をめぐる議論が多い。が、それらに先行して何をおしえるかということへの教師自身の自覚が大切なのではないかとわたしはおもう。また、FDの名のもとに、教育が画一化へのみちをあゆんでいるようにも感じる。さまざまな教育の可能性がありうるのであり、その多様性がみなおされる必要があるのではないか。同僚の授業をかいまみて、そんなことを感じた次第である。



第5回 FD - YG 会開催報告

生活科学部食物栄養科学科 山本 寿

開催日程：2010年6月16日（水） 16：30～17：30

開催場所：京田辺キャンパス知徳館 C182教室

上記日程および会場で開催された第5回 FD - YG 会において「同志社女子大学における GPA 制度の導入経緯と検証」というテーマで以下の内容の講演を行ない、終了後、出席者との質疑・意見交換に応じた。

1. 旧 GP 算出法の不合理性

GPA (Grade Point Average) は各学生の成績指標の一つであり、全登録科目の GP (Grade Point) の単位加重平均として定義される。しかし、各登録科目において GP を与える算出法 (Grading System) に統一的なものはない。現在、米国の大学で見られる最も典型的な Grading System は、各科目に対して教員が与える 12 段階の Letter Grade: F, D⁻, D, D⁺, ..., B⁺, A⁻, A⁺ (A) に 0, 0.7, 1, 1.3, ..., 3.3, 3.7, 4.0 という GP を対応させるものである。

一方日本の多数の大学では、GPA 制度導入以前に 100 点評価法が定着しており、100 点法の素点 60 点から 10 点間隔で 1, 2, 3, 4 (不合格 60 点未満は GP=0) という 5 通りの GP へ変換する算出法 (以下、「旧 GP 算出法」と呼ぶ) が普及した。この変換は、素点の 1 桁目が GP に反映されない、極端な粗視化 (有効数字の桁落ち) になっており、小数第 1 位 (有効数字 2 桁) まで明示する GPA において統計精度上の過誤を生む。特に 100 点法と併用する場合、順位が逆転するなど、評価制度としての不公正さが露わになる。

2. 新 GP 算出法の考案

筆者は本学での GPA 制度導入検討時に、旧 GP 算出法の上記欠陥を解消するため、2 桁の精度を持つ 100 点法素点に、それと同精度の GP を対応させる算出法を考案した。この方法では 100 点法での合格範囲 Percentage 空間 (59.5-100.0%) から、例えば 84.5-85.5% → 素点 85, GP=3.0 というように、素点と同等の精度を持つ有効数字 2 桁の GP を対応させることで、GPA 数値の有効性も 2 桁 (小数第 1 位) まで保持される。100 点法素点 x と GP の関係は 2 次的に、 $GP=(x-55)/10$ という (粗視化のない) 1 対 1 の線形対応で与えられる (新 GP 算出法)。本学での導入後、お茶の水女子大の半田智久氏は静岡大在職時にこの GP 算出法を評価し、その GPA 制度を Functional GPA と呼んで普及に努めている。

3. GPA 制度の導入

本学では 2002 年度から GPA 制度導入が教務課を中心に検討され始めた。従来の 100 点法成績評価を残存させ、GPA と併用することはすぐに合意された。筆者が指摘した旧 GP 算出法の不合理性と新 GP 算出法の合理性も論議を重ねる中で間もなく理解された。当初、新 GP 算出法では最高 GP が 4.5 となることに違和感を持たれ、変更案も検討されたが、論議を重ねる中で上記算出法の採用に落ち着いた。この点についての検討が終息した後、新たな議論が巻き起こった。すなわち、GP が算出された後、「不合格科目も含めた全登録科目についてその単位加重平均を取る」という GPA 制度の根幹部分 (この点での例外は全国的にも少ない) に抵抗感を持たれ、その意図を汲んだ変更案、つまり「再履修合格科目の取り扱いにおいて同一科目の不合格履歴を平均範囲から除く」という案が最終的な教務部案としてまとめられ、

2003年秋の教授会に提出された。

教授会ではこの平均範囲に関わる部分に対して討論が展開された。そして、全登録科目のGPを平均するという本来のGPA算出法に戻すことを旨とする修正動議が提出され、投票の末、可決された。また、GPA制度は学生の履修登録に対して厳しい姿勢で臨む制度であるので、一定の登録修正期間を設けること、また教員の教育方法の組織的改善、すなわちFDを充実していくことなどが付記されることになった。

こうして、新GP算出法に基づく本学のGPA制度導入が決定し、2004年度新入生から適用された。この制度はその後混乱もなく運用されてきたが、一方でそれほど活用されてもこなかった。しかし、100点法による合格科目平均に代わる学生の成績指標として、近年ようやく、様々な部署において累積GPAが活用され始めている。

4. 本学のGPA制度の検証：(3学科)新旧GPA差とその原因

2009年夏、教育・研究推進センター主催の下でGPA検討会が学内で開かれ、本学に導入されたGPA制度に関わる諸問題が包括的に検証された。まず、現在のGPA制度が導入された経緯が振り返られた後、一部の他大学で本学と同じあるいは類似のGPA制度が導入され、GPA制度の研究者から評価されていることが報告された。また、GPA制度導入の利点として期待された通り、登録後の履修放棄が激減したことも確認された。次に、国際教養学科などの学生が海外に留学する場合、小数点以下のGP表記や最高GP 4.5を持つGrading Scaleが国際的に理解されにくいこと、全国8割の大学でGP最大値が4.0であることなどの懸念が指摘された。この点について国際交流センターから、本学のGPA算出法を留学先大学に説明することで国際交流上、特に大きな問題は生じていないことが報告された。

実際、2010年5月のGPAセミナー（地域科学研究会、東京）では、半田氏が自身のGPA制度の国際調査結果に基づいて以下のように報告している。アジアではGPを日本のように5段階設定している大学は15%に過ぎず、全体の約半数は8段階前後の等級分けをしており、国際標準と呼べるGrading Systemは存在しない。最高GPも4.0とは限らない。

2009年の本学GPA検討会ではさらに以下の懸念が示された。現行のGPA算出方法では、100点法の80点がGP 2.5に換算されるので、他の国内大学に比べてGPAが低く算出され、海外に留学する学生にとって不利ではないか。確かに本学のGPAの最頻分布領域は2.5-3.0にあり、素点80点は旧GPで3.0、新GPで2.5と算出されるため、GPレベルでは確かに0.50の損差が生じる。このGP損差は大きいですが、全科目の単位加重平均であるGPAで同程度の損が生じるとは考えられず、実際のデータで検証する必要が指摘された。

そこで2010年春、教育・研究推進センターと教務部の協力の下、本学3学科の4年次生（学芸学部国際教養学科94名、現代社会学部社会システム学科100名、生活科学部食物栄養科学科管理栄養士専攻94名）を対象に、新旧両GP算出法で得られるGPAの差（新-旧）や順位変動などについてシミュレーションを行なった。その結果、3学科平均で約-0.12の新旧GPA差があり、その絶対値や順位変動の大きさには「理系<文系」の傾向が認められた。

そこで、このような結果が生じた原因が「元の100点法採点で10倍数素点（GP損最大）をつけやすい」という教員の採点傾向にあると推測し、素点（ ≥ 60 ）が10倍数である単位加重頻度割合 $\text{Freq.}(X_0)$ と新旧GPA差との相関を学科毎に調べた。その結果、予想通り、 $\text{Freq.}(X_0)$ の分布はほぼ全ての学生で0.10（素点1桁目に採点の偏りがないと仮定した理想値）を上回り、その傾向は特に文系学科で大きかった（個人別最大0.56）。 $\text{Freq.}(X_0)$ の増大に伴って新旧GPA損差（負）の絶対値は増大する傾向にあり、相関係数は0.46-0.69であった。学科毎の相関分布に対する近似直線は異なる傾きを持つが、 $\text{Freq.}(X_0) = 0.10$ まで外挿したときに得られる推定GPA差は3学科とも-0.0500に近い値（国際教養：-0.0480、社会システム：-0.0465、管理栄養士：-0.0456）であった。

Freq.(X0)=0.10 での新旧 GPA 差 -0.0500 は新旧 Grading System そのものの重心差と解釈される。例えば、旧 GP 算出法での GP=3.0 に対する素点分布 80, 81, ..., 89 の中央値は 84.5 であるが、新 GP 算出法での GP=3.0 に対応する素点は 85 である。このズレが合格範囲において一律に新旧 GPA 差 -0.0500 を生む。この事情を考慮すると、今回明らかになった新旧 GPA 差は概ね「Freq.(X0)効果+重心差」で説明される。

しかし、Freq.(X0)=0.10 での推定新旧 GPA 差の絶対値は上記のように 3 学科とも 0.0500 よりわずかに小さく、緩和の程度は、国際教養<社会システム<管理栄養士の順に高い。この緩和効果は不合格科目 (GP は常に 0 で新旧差なし) あるいは素点満点 (新旧 GP 差は 0.50 得) の場合から生じると考えられた。3 学科の単位加重不合格率と単位加重満点率を調べた所、両者の平均値 (%) はそれぞれ 2.51-7.87 と 0.94-3.28 であり、両者共に国際教養<管理栄養士<社会システムの順に高かった。

以上、今回のシミュレーションで得られた平均 -0.12 の新旧 GPA 差は 3 つの異なる効果の和と解釈される。第 1 の効果は教員が 10 倍数をつけやすい採点傾向を持つことから生じ、負 (-0.15-0) の効果を示す。第 2 の効果は新旧 Grading Scale の重心差から生じる負効果 (-0.05) である。第 3 の効果は不合格や素点満点の場合から生じ、新旧 GPA 損差をわずかに緩和する (正効果)。

新旧 GPA 差に最も大きく影響し、その大きさが学生や科目毎に異なるのは第 1 効果である。新旧 GPA 差を緩和し、公正さを維持するためには、各教員が 10 倍数素点では新旧 GP 損差が最大になることを認識し、安易な採点法に流れないように留意すべきである。これを教員個人にまかせず、システム (制度) として解決する方法として、半田氏が提唱している絶対的相対評価法が参考になる。この方法では、教員がそれぞれの評点法で原成績を出し、事実上の最高点と合格最高点を決める。それを教務課などが組織的に線形変換によって相対評価点へ変換する。これは個人レベルでも実行可能であり、実際、講演後の質疑応答で、ある教員からそれをすでに実行しているとの報告があった。

(事務局より)

※上記 FD - YG 会関係資料のご希望がございましたら、教育・研究推進センター事務室までご連絡ください。

第6回FD-YG会開催報告

教育・研究推進センター主任 神田 知子

開催日程：2011年2月17日（木） 13：30～15：00

開催場所：今出川キャンパスジェームズ館 206会議室

第6回のFD-YG会は「初年次教育の取り組みについて」をテーマとした。その背景として、2011年度から文部科学省が行う大学生の「就業力」向上5か年計画の柱として、全国の大学・短大に「キャリア教育」を義務づけたことがある。キャリア教育とは、社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度をはぐくむ教育のことである。文部科学省が実施した各大学における教育内容の改革状況についての調査によると、2008年度に「初年次教育」を導入している大学は82%であった。また教育課程内、教育課程外のいずれかで「キャリア教育」を実施している大学は93%、そのうち授業科目として実施する大学は85%、授業科目以外の特別講義等で実施する大学は50%であったことが報告されている。

そこで本学の取り組み状況として、表象文化学部英語英文学科の若本夏美教授、生活科学部食物栄養科学科の山本寿教授に、各学科の事例をご紹介いただいた。

参加教員は英語英文学科、食物栄養科学科、日本語日本文学科の教員11名と学長であった。

1. 英語英文学科の取り組み紹介（若本夏美教授）

2009年度の表象文化学部開設に伴い新設された科目として「キャリアイントロダクション（1年次の秋学期開講の必修科目）」がある。目的は1年次の早い段階から大学卒業後のイメージしながら、自分自身の学習モデル、ライフモデルを構築できるようにすることである。授業は3名の非常勤講師（2010年度は海外の企業、仕事と家庭を両立する主婦、プロの翻訳・通訳家であるが、担当者は変更あり）と学内のコーディネーターの若本夏美教授（教職課程）がそれぞれ3回ずつ分担して担当するリレー形式で行われる。場合によっては先輩やゲストスピーカーを招聘することもある（ただし、交通費・謝金なし）。最終回はシンポジウム形式で4名の教員が学生の質問に答える場が設けられている。評価はレポート点と出席でつけられる。

2009年度から実施された科目なので効果はまだわからないが、学習モデルの構築には役立っている感がある。教員同士のイメージの共有や教員のモチベーションの維持は難しいところもある。受講生が多いのでTA制度など人的サポートが必要である。

2. 食物栄養科学科の取り組み紹介（山本寿教授）

2010年度から管理栄養士専攻の学生を対象に管理栄養士国家試験の合格という目標に向けた初年次オリエンテーションを開始した。過去6年間（2004～2009年度）の管理栄養士専攻生は国家試験の高い合格率を維持してきた。しかし、近年の在学生の管理栄養士専攻生としての意識や自覚の低下、体験模試の成績低下が顕著である。このことは、ゆとり教育と無関係ではないのかもしれない。そこで、2-3年次の国家試験体験模試では不十分として、入学直後の初年次オリエンテーション（キャリア教育）の必要性がでてきた。

2010年度の初年次オリエンテーションは4月末に、学科主任（山本寿教授）がコーディネーター役となり、3名の教員が「管理栄養士の活躍の場」、「管理栄養士として求められる資質（調理力・コミュニケーション力）」について、国家試験対策職員が過去の分析例を踏まえた「管理栄養士国家試験について」というテーマでメッセージを伝え、最後に質問票を集めて質疑応答するという形式で行った。学生のレポー

トから、オリエンテーションの実施は良かったという声が多かったものの、効果が時間と共に希薄化してしまうという問題点があったので、2011年度は2年次生向けに新たなオリエンテーション（キャリア教育）を追加する予定である。

食物科学専攻生に対しては、「生活科学概論」がキャリア教育に相当する科目であるので、充実したものにしていきたい。

若本夏美教授からは講義を効果的に行うための工夫点として、プリントの配布方法、様々な小道具の活用についても紹介していただいた。2011年4月よりキャリア教育が義務化される中、FD-YG会を通して各学科の初年次教育の取り組み方法やその課題を共有することはこれからのキャリア教育を考える上で有意義であった。

(事務局より)

※上記FD-YG会関係資料のご希望がございましたら、教育・研究推進センター事務室までご連絡ください。

FD 図書紹介

『学生主体型授業の冒険：自ら学び、考える大学生を育む』

小田隆治・杉原真晃編著（ナカニシヤ出版）、2010年

教育・研究推進センター主任 藤井 健志

FD 活動（と呼んでいいレベルのものかは本当のところ分からない）をはじめから18年が経とうとしている。きっかけは、前任校の上司（教授）からの「君はここに研究をしに来たのかもしれないけれども、教育もできるようにしておいて」との一言である（そして、下記の「医学教育マニュアル」を渡された。その後自費で購入）。

これまでに、それなりの数の教育・FDに関連する書籍や授業研究論文を読んできた。この1年間に自費で購入した教育・FD関連の書籍は15冊になる。しかしながら、多少なりとも参考になるものは少ない。というのも理由は明らかである。なぜかこの種の書籍には、自身の実践するかなり「一般化された」成功例や自説のこと、あるいは抽象的なスローガン、しか書かれていないことがほとんどである（もちろん、大方の論説文というものはそうであるが…）。また、多少の失敗談や他者の説（への批判）にも触れられていないと「何が正しかったのか」、「何が良かったのか」が見えてこない。そして、悪者（がいる場合）は、学生かFD活動をしていない教員のどちらかであることも共通している。

医学教育（医学部教育ではない）界には、「医学教育マニュアル」・全5巻・篠原出版（現篠原出版新社、1978年刊）なる名著（？）がある。医学部・医科大学によっては全教員が読むことを義務づけられているそうである。このマニュアルには、現在、分野を問わず大学教育現場にある、ほとんどすべての問題に対する答えがすでに書かれている（と思う）。

さて、前置きがかなり長くなってしまった。本書のタイトル通り、学生主体型の授業を実践している14名の教員による16編の授業報告集である。「学生主体型授業の方法論」、「新しい教養教育の試み」、「自然科学教育における実践」、「キャリア教育における実践」の各テーマで分けられ、具体的な授業名とともに「成功例（と一部失敗談）」が書かれている。いずれの報告にも、教材（題材）の選び方、目標の立て方、教員のかかわり方、授業の構成、学生からの「評価」が書かれており、これまでのこの種の報告と比較すると内容が行き届いている。ただ残念でならないのは、教員（時に学生）の立てた目標に学生がどの程度到達できたかの評価を含めて、学生の「評価（評定）」をどのようにしたのかがほとんどの報告でわからないことである。

本書には、あまり書かれることがない自然科学系の科目についても報告が記載されている。特に興味を引かれたのが北大名誉教授・阿部和厚先生による第12章・「医学部で学生主体型授業を実践する - 学生が主役の授業：学生はすばらしい①」の中の、「医学研究方法論：医学研究方法を科学する」で実践された授業に関する報告である。「学生主体型」授業には、「能動性・主体性」はもちろんのこと、「コミュニケーション能力」、「ディスカッション能力」、「プレゼンテーション能力」、「問題発見解決能力」の育成などが求められている（第1章より引用）。もちろん、これらの育成が授業の「目的」になってもよい。「何のために」がこの報告では明快であるのが良い。この種の授業の必要性を感じているだけに参考になるところ大であった。

ところで、「学生主体型」授業は、授業形式の1つでしかなく、単に実践することが目的であっては意

味がない。どの授業形式にも一長一短がある。「知識」詰め込み型授業の反省のもとに、「学生主体型」授業の実践が注目されることが多くなってきている。しかしながら、「知識」はある程度「伝授」されないと、効率の良い学習が進むわけではない。薬学部では、膨大な「知識」の習得を求められる実に多様な専門科目が存在するだけに、「講義型」、「学生主体型」などの様々な授業形式のバランスをかんがえることは切実な問題である。この問題を解決する有効な方法はないものかと思案し続けているが、未だ有効な解決策は見いだせていない。

(事務局より)

※当センターでは、FD 関係図書及び資料の貸出サービスをしております。本号で紹介した図書を含め、図書・資料リストについてホームページ上にも掲載しておりますのでご活用ください。

関西地区 FD 連絡協議会報告◆

関西地区 FD 連絡協議会「FD デザイン研究サブグループ」に参加して － Web 公開授業システム“MOST”について－

教育・研究推進センター主任 三宅えり子

関西地区 FD 連絡協議会は約10年前に組織され、現在135大学が加入しています。協議会内には「授業評価研究サブ・グループ」（サブ・グループを以下 SG とする）、「Web 公開授業研究 SG」、「出欠確認 SG」（FD メディア研究 SG）、および「FD デザイン研究 SG」の4つの研究 SG があり、前者3グループはすでに立ち上がり活動を行っています。私は4番目の「FD デザイン研究 SG」の第1回会合に参加しました。参加者は神戸大学から教員2名、京都大学から教員3名、同志社女子大学から私を入れた6名でした。神戸大学の米谷氏から「FD デザイン研究 SG」の趣旨説明が行われた後、話題提供として、京都大学高等教育研究開発推進センターの酒井博之氏より「オンライン FD 支援システム“MOST”と FD デザイン」に関する興味深いプレゼンテーションが行われました。

MOST は2009年に京都大学高等教育研究開発推進センター（以下京大センターとする）が開発したオンラインで授業公開と授業討論会を行うシステムで、全国の大学に開かれており教員が自由に利用できるようになっています。京大センターではこの MOST を活用して、学内の教員集団が相互研修型 FD を行い、学外に対しては大学連携も含めたコミュニティ・ネットワーク形成を通して FD の拠点づくりを行おうとしています。

MOST が開発された背景には、京大センターが2006年から2009年まで行った Web 公開授業の経験が生かされた点、カーネギー財団・知識メディア研究所の ICT を活用した教育実践の支援活動が参考にされた点、およびオープン・エデュケーション（教育の質向上の解決策としての教育のオープン化）の概念を具現化した点が存在します。

MOST は Mutual Online System for Teaching and Learning の略で、URL は <https://online-tl.org> となっています。対象者は、大学教員、職員、大学教員を目指す大学院生で招待制になっており、登録者は自由にオンライン・コミュニティを形成することができます。ただし、登録のみでは何も起こらないため、互動的貢献が期待されます。MOST の URL にアクセスすると、まずスナップショットを作成し、テンプレートの指示に沿ってコンテンツを作成するようになっています。また、コミュニティで利用できる様々なツールがそろっています。

MOST の授業改善に関するテンプレートを利用すると、授業分析、授業改善、コースポートフォリオに関する事柄が文書化され可視化されることにより、ミクロ・レベル、ミドル・レベル、マクロ・レベル（FD 担当者間）のすべての段階で利用できる可能性が広がります。一方、MOST 開発前の Web 公開授業の課題としてあげられていた、能動的な関与への動機づけやその維持が困難な点がどのように MOST によって改善されたのかが気になるころではあります。そのような疑問が残るものの、MOST の今後の役割としての意義は、教育実践の議論や協調活動の触媒となり、個別の文脈を含む多様な取り組みの総体としての MOST そのものが、教員にとって FD の教材となりえる可能性があるという点にあるようです。

FD 活動報告 (2010年度) ◆

分類

- 1 本学 FD 事業関係
- 2 学外における FD 活動
- 3 FD 関係会議

2011年 3月 現在

1 本学FD事業関係

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
3月	2010年度 新任教員対象 FD ガイダンス	総務部	新任専任教員に対し、本学 FD 事業のガイダンス実施（懇談含む）
4月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第14号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第14号の配信
5月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第15号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第15号の配信
6月	授業アンケート実施科目 の確認	全学部学科 教育・研究推進センター	全科目担当者に対する問合せ及び学部学科での確認作業
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第16号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第16号の配信
	第5回 FD-YG 会の 開催	教育・研究推進センター	事例説明者 山本寿教授（生活科学部食物栄養科学科） 参加者 30名（職員含む） テーマ 「同志社女子大学における GPA 制度の導入経緯と検証」
7月	2010年度春学期 授業アンケートの実施	教育・研究推進センター	実施期間 7月12日（月）～7月23日（金） 予備週含む
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第17号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第17号の配信および嘱託講師への配布
8 9月	2010年度春学期授業 アンケート実施結果の フィードバック	教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2010年度春学期授業 アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果（全科目）を公開
	2010年度 FD 講習会・情報交換会の 開催	教育・研究推進センター	講演 『大学教育の挑戦－学生の主体性を育むための授業の工夫－』 講師 杉原真晃氏 山形大学 基盤教育院/ 高等教育研究企画センター准教授
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第18号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第18号の配信および嘱託講師への配布
10月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第19号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第19号の配信および嘱託講師への配布
11月	2010年度 在学生調査の実施	教育・研究推進センター	在学生、全員によるアンケート調査を例年通り実施 （実施結果の報告は、来年3月末頃の予定）
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第20号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第20号の配信および嘱託講師への配布

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
12月	2010年度秋学期授業アンケートの実施	教育・研究推進センター	実施期間 12月27日(月)～1月19日(水) 予備週含む
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第21号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第21号の配信および嘱託講師への配布
	授業参観	教育・研究推進センター	授業参観の実施(京田辺・今出川両キャンパスにて)
1月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第22号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第22号の配信および嘱託講師への配布
	授業参観 フィードバック	教員・研究推進センター	授業公開された教員に、授業参観参加者のコメントをフィードバック
2月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第23号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第23号の配信および嘱託講師への配布
	2010年度秋学期授業アンケート実施結果のフィードバック	教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2010年度秋学期授業アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果(全科目)を公開
	第6回 FD-YG 会の開催	教育・研究推進センター	事例説明者 山本寿教授(生活科学部食物栄養科学科) 若本夏美教授(表象文化学部英語英文学科) 参加者 14名(職員含む) テーマ 「初年次教育の取組について」
3月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第24号	教育・研究推進センター	メルマガ『同女 FD ニュース』第24号の配信および嘱託講師への配布
	FD レポート第4号の発行	教育・研究推進センター	3月下旬発行予定

2 学外におけるFD活動

実施時期	活動内容等	参加者	概要
4月	関西地区 FD 連絡協議会 第3回総会への参加	センター係員	京都大学にて開催
5月	「GPA 制度の進化と成績 評価の説明責任」セミナー への参加	センター次長	東京 御茶ノ水にて開催 講師 本学生活科学部食物栄養科学科 山本寿教授
6月	私立大学フォーラムへの参加	センター次長、事務主任、 係員	関西大学 高槻ミューズキャンパスにて開催
	高等教育情報センター セミナーへの参加	センター次長、事務主任	テーマ:「教育責任の実質化ー教員評価・人事制度の進化と運用IV」 明治薬科大学にて開催
7月	京都 FD セミナーへの参加	センター所長	大谷大学 メディアホールにて開催
9月	FD デザイン研究 SG 第1回会合への参加	センター主任	神戸大学 国際文化キャンパスにて開催
	公開シンポジウムへの参加	センター主任	京都大学にて開催
12月	「創価大学 第8回 FD フォーラム」セミナーへの 参加	センター次長	創価大学 八王子キャンパスにて開催
1月	2010年度 第2回 FD セミナーへの参加	センター次長	龍谷大学 深草キャンパスにて開催

実施時期	活動内容等	参加者	概要
2月	同志社大学 PBL 推進支援センター 2010年度 第2回シンポジウムへの参加	本学教員、センター所長	テーマ：「PBL 教育における多面的評価－ PBL は社会で役に立つか」 同志社大学にて開催
3月	大学コンソーシアム京都 第16回 FD フォーラムへの参加	本学教員、職員 参加人数 26名	テーマ：「組織的 FD の取り組み－ FD の義務化から現在(いま)」 京都外国語大学にて開催 分科会報告：現代社会学部社会システム学科 三宅えり子准教授「女子高等教育戦略に向けて～共学大学・女子大学における女子教育力の試行的比較調査より～」

3 FD 関係検討会議等

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
4月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	2010年度春学期授業アンケート 実施概要・時期について
			在学生調査アンケート 実施結果について
			教育・研究支援ハンドブックについて
5月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会 依頼テーマについて
			新入生アンケート調査結果について
			2010年度 FD－YG 会の開催について
6月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会について
7月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	FD レポート編集企画について
			FD 講習会について
			在学生アンケートについて
8月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	2010年度在学生アンケート削除項目取消の件
9月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	2010年度秋学期授業アンケートについて
			FD フォーラム講師依頼について
			2010年度授業参観について
10月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	2010年度授業参観について
			FD 講習会について
11月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会報告書について
			FD レポート第4号について
12月	2010年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	なし
1月	2011年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	2011年度 FD 講習会 講師・テーマについて
			第6回 FD－YG 会について
			2011年度 FD 事業の概要について
			2011年度 FD 事業日程について
2月	2011年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	2011年度 FD 講習会 講演講師・テーマについて
3月	2011年度 FD 推進事業内容について	センター主任会	未定

メルマガ「同女FDニュース」の発行報告◆

2010		
月	ニュース	トピックス
4月	大学コンソーシアム京都主催「第15回FDフォーラム」の参加者について	FD関係資料の紹介
	2009年度秋学期授業評価報告の公表について	FD関係セミナー、講演会の案内
	「FDレポート第3号」の発行について	
	新任教員対象FDガイダンスの開催について	
5月	2010年度春学期授業アンケート実施科目調査書の配布について	FD関係資料の紹介
	2009年度秋学期「成績平均点・合格率」等の配布について	FD関係セミナー、講演会の案内
6月	第5回FD-YG会の開催について	FD関係資料の紹介
	HP教員紹介について	FD関係セミナー、講演会の案内
7月	2010年度春学期授業アンケートについて	FD関係資料の紹介
	2010年度FD講習会の開催について	FD関係セミナー、講演会の案内
	第5回FD-YG会の開催報告について	
8月	休 刊	休 刊
9月	2010年度春学期授業アンケートについて	FD関係資料の紹介
	2010年度FD講習会の開催について	FD関係セミナー、講演会の案内
10月	2010年度FD講習会について	FD関係資料の紹介
	2010年度春学期授業評価報告について	FD関係セミナー、講演会の案内
11月	2010年度秋学期授業アンケート実施科目調査について	FD関係資料の紹介
	2010年度在学生アンケートの実施について	FD関係セミナー、講演会の案内
	教員研究・教育活動等報告書2010について	
	2010年度春学期「成績平均点・合格率」等の配布について	
12月	2010年度授業参観について	FD関係資料の紹介
	2010年度在学生アンケートについて	FD関係セミナー、講演会の案内
	教員研究・教育活動等報告書2010について	
1月	大学コンソーシアム京都 第16回FDフォーラムについて	FD関係資料の紹介
	2010年度秋学期授業アンケートについて	FD関係セミナー、講演会の案内
	教員研究・教育活動等報告書2010校正について	
2月	第6回FD-YG会の開催について	FD関係資料の紹介
	教員研究・教育活動等報告書2010校正について	FD関係セミナー、講演会の案内
3月	2010年度秋学期授業アンケートについて	FD関係資料の紹介
	第6回FD-YG会の開催報告について	FD関係セミナー、講演会の案内
	第16回FDフォーラムについて	

次年度 FD 事業の概要・日程◆

同志社女子大学 教育・研究推進センター FD 事業の概要

I 教員『教育活動の公表』

1. 本学教員の教育活動について研究活動とともに、『教員研究・教育活動等報告書』として冊子で公表する。学生は図書館で閲覧可能。(年1回発行)
2. 本学教員の教育活動は、研究活動とともに、当センターホームページ上で学内外に公開する。

II 授業アンケートの実施とフィードバック(科目区分代表者および個々の教員へ)

3. 『学生による授業評価』として授業アンケートを春秋年2回実施する。
4. 『科目区分代表者及び科目担当者へのフィードバック』として、授業アンケート実施結果、及び同一科目区分の学生評価平均値及び大学全体の学生評価平均値データをフィードバックする。(春秋年2回)
5. 『授業の改善状況把握』 教員個々の授業アンケート実施結果を蓄積管理する。(紙、電子データ)

III 授業評価報告の作成と公開

6. 学生による授業アンケートの結果に対して科目担当者及び科目区分代表者がコメントを記載し、『授業評価報告』として図書館で公開する。(春秋年2回)

IV 教員による授業参観の実施

7. 授業の改善を目的として『教員による授業参観』を実施する。

V FD 関係講習会等の開催・案内

8. 本学主催 FD 関係講習会等を開催する。
9. 学外で開催される FD 講習会等を学部学科、関係教員に案内し、FD に対する意識向上に努める。

VI 新任教員 FD ガイダンス

10. 本学 FD 事業に関わるガイダンスを、総務部が所管する入社前オリエンテーションの中で行う。(実施時期：2011年3月24日)

VII FD の啓発・広報関係事業

11. FD 啓発誌『FD レポート』(旧 FD フォーラム)を発行する。(年1回)
12. メルマガ《同女 FD ニュース》を配信する。(月1回配信)
13. 当センターの FD 事業内容及び FD 活動報告を本学ホームページ上で情報を公開する。

VIII 教育開発・研究会等に関わる支援

14. 教育開発・各種研究会への支援(2010年度「FD-YG 会」、2009年度「FD-YG 会」「GPA 検討会」、2008年度「FD-YG 会」、2006～2007年度「e-learning 研究会」、2006年度「授業アンケート研究会」)

IX 大学院 FD 推進事業

15. 大学院における FD を推進する。
 - ・大学院生による授業評価の実施については、大学院委員会の審議結果により見合わせる。
 - ・その他の FD 活動(学部教育における FD 活動で対応)

X その他 FD 関係の支援

16. FD 関係図書・資料等を収集し 教職員への貸し出し・利用に提供する。
17. FD 関係講習会等の参加費・出張費等を補助する。
18. その他、本学 FD に関すること。

2011年度 FD 推進事業日程（予定）

春学期

- 3月
 - ・ 新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンスの実施
（開催時期：3月24日開催）
- 4月
 - ・ 新入生アンケートの実施
- 5月
 - ・ 春学期授業アンケート実施科目の確認
- 7月
 - ・ 春学期授業アンケートの実施 7月18日（月）～ 29日（金）
- 8月
 - ・ 授業アンケート実施結果のフィードバックとコメント依頼
 - ・ 授業アンケート集計結果（冊子）配布
 - ・ 授業評価報告（アンケート集計結果）を図書館にて公開（速報）
- 9月
 - ・ FD 講習会
 - ・ 春学期授業評価報告（コメント）の回収
 - ・ 授業評価報告（コメント添付済み分）を図書館にて公開
 - ・ HP 教員紹介公表（2010年度より教育業績も追加）

秋学期

- 10月
 - ・ 秋学期授業アンケート実施科目の確認
- 11月
 - ・ 教員相互による授業参観の実施
 - ・ 在学生アンケートの実施
- 1月
 - ・ 秋学期授業アンケートの実施 1月12日（木）～ 25日（水）
- 2月
 - ・ 授業アンケート実施結果のフィードバックとコメント依頼
 - ・ 授業アンケート集計結果（冊子）配布
 - ・ 授業評価報告（アンケート集計結果）を図書館にて公開（速報）
 - ・ 秋学期授業評価報告（コメント）の回収
 - ・ 授業評価報告（コメント添付済み分）を図書館にて公開
- 3月
 - ・ 大学コンソーシアム京都主催「FD フォーラム」への参加
（各学科2名以上の参加を要請）
 - ・ 「教員研究・教育活動等報告書」の発行
 - ・ 「FD レポート」第5号の発行

年間を通して

- ◎ 「FD-YG会」および教育開発に関わるセミナー・研究会を支援
- ◎ 学外で開催されるFD関係講習会等を案内、参加費・出張費等の補助
- ◎ FD関係資料・図書等を収集、貸し出し
- ◎ メールマガジン「同女FDニュース」を配信（月1回配信）
- ◎ FD活動報告を当センターホームページ上で掲載（毎月更新）

編集後記

大学界で、FD がさげられるようになってから、かなりの時間が経過した。本学は、他大学からやや遅れてFD が出発した（2006年4月に教育開発推進センター発足）。その後、本学のFD は、教育・研究推進センターが核となり、教育と研究をめぐって、さまざまな試みが展開されてきた。大学の教育が高校までとは違って、研究を前提としていると考える立場からは、本学のFD のあり方は健康的であるといえるだろう。当初は耳慣れなかったFD ということばが今では定着し、試行錯誤をくりかえしながらも、その中身が次第に充実してきたといえよう。

9月に開かれたFD 講習会では、学生の主体性を育てるための双方向的な授業の紹介を聞き、講師と参加者との情報交換会をおこなった。FD-YG 会は、2度開催され、本学のGPA 制度（山本寿先生考案）がすぐれたものであること、初年次教育の取り組みの事例が紹介され、卒業後にむけて、入学直後にオリエンテーションをする必要があることが話題になった。その他、FD に関する学内・学外の各種の事業・活動があった。本誌にその詳細が紹介・記録されている。

現在の学生たちは、あふれる情報と多様な可能性の中で生きている。たくさんのもが与えられたから、それでいいというものでもない。適切な取捨選択がなされなければならない。それができずに、消化不良のままで終わってはいないだろうか。また、IT 機器の発達には、われわれの生活を便利にしてくれた。しかし、便利さの獲得のかけに、大切なものを失ってはいないか。とにかく忙しい。学生に接していて、かれらはじっくりと自らをみつめなおす、時間的かつ精神的な余裕がないのではないかと思うことがある。これは教職員も同じである。次から次へと要求される書類作りをはじめ、さまざまな雑務に追われる毎日である。流行だからとか、どこかでやっているからとか、そんな理由だけから行動を起こすのはやめたい。目先の目標ではなく、先をみすえるべく自分を見つめなおす機会をもちたいと願う。そのような余裕の中にこそ真のFD が存在するのだとおもう。

本誌への寄稿、編集に協力くださった方々にお礼もうしあげる。本誌が今後の教育にとって有益な資料になることを切望する。

教育・研究推進センター主任 村木新次郎

FD レポート 第4号

2011年 3月 発行

同志社女子大学 教育・研究推進センター

〒610-0395 京都府京田辺市興戸

TEL (0774) 65-8679 FAX (0774) 65-8680

E-mail:kyoiku-t@dwc.doshisha.ac.jp

ホームページ <http://www.dwc.doshisha.ac.jp>

